

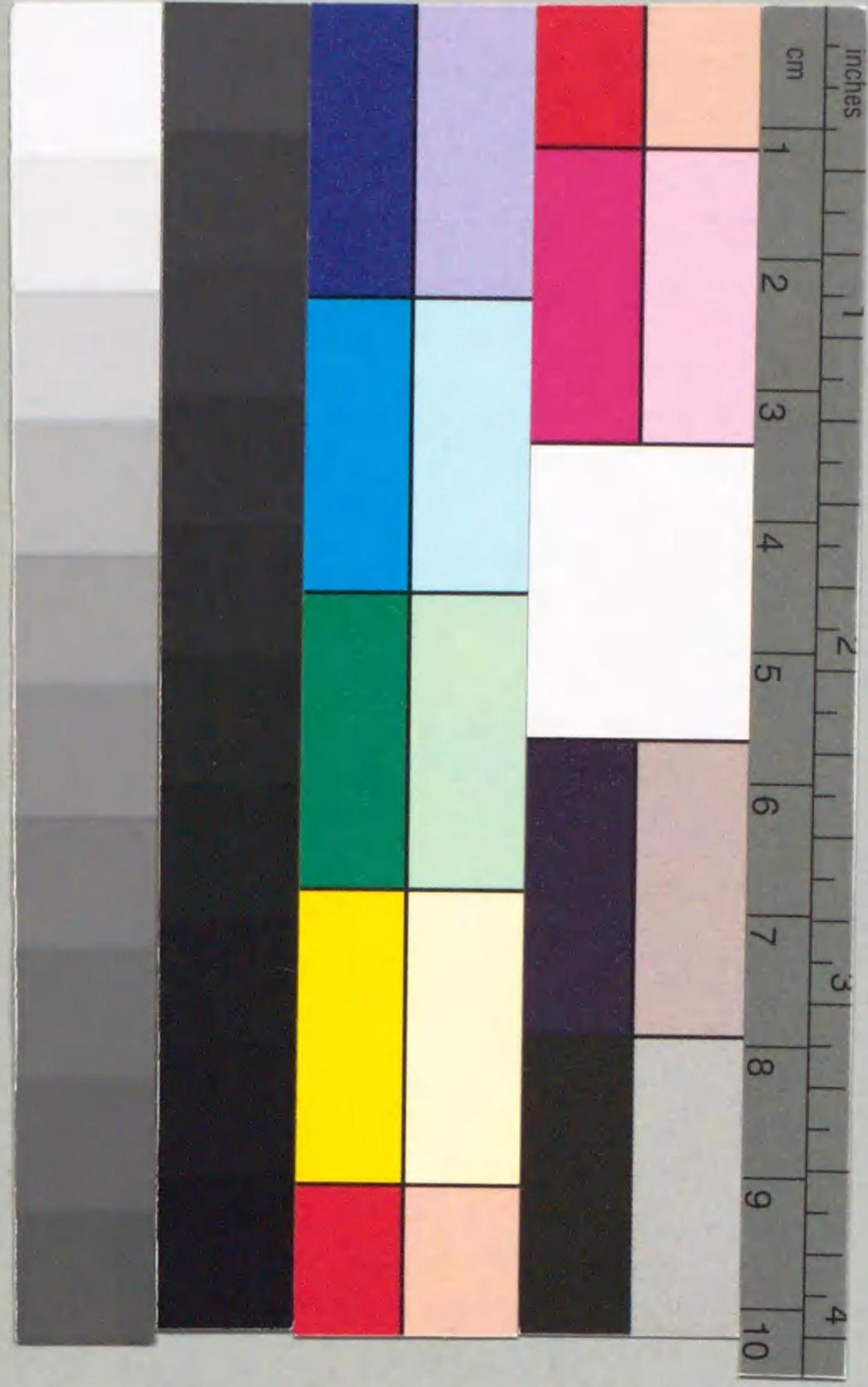
HK25

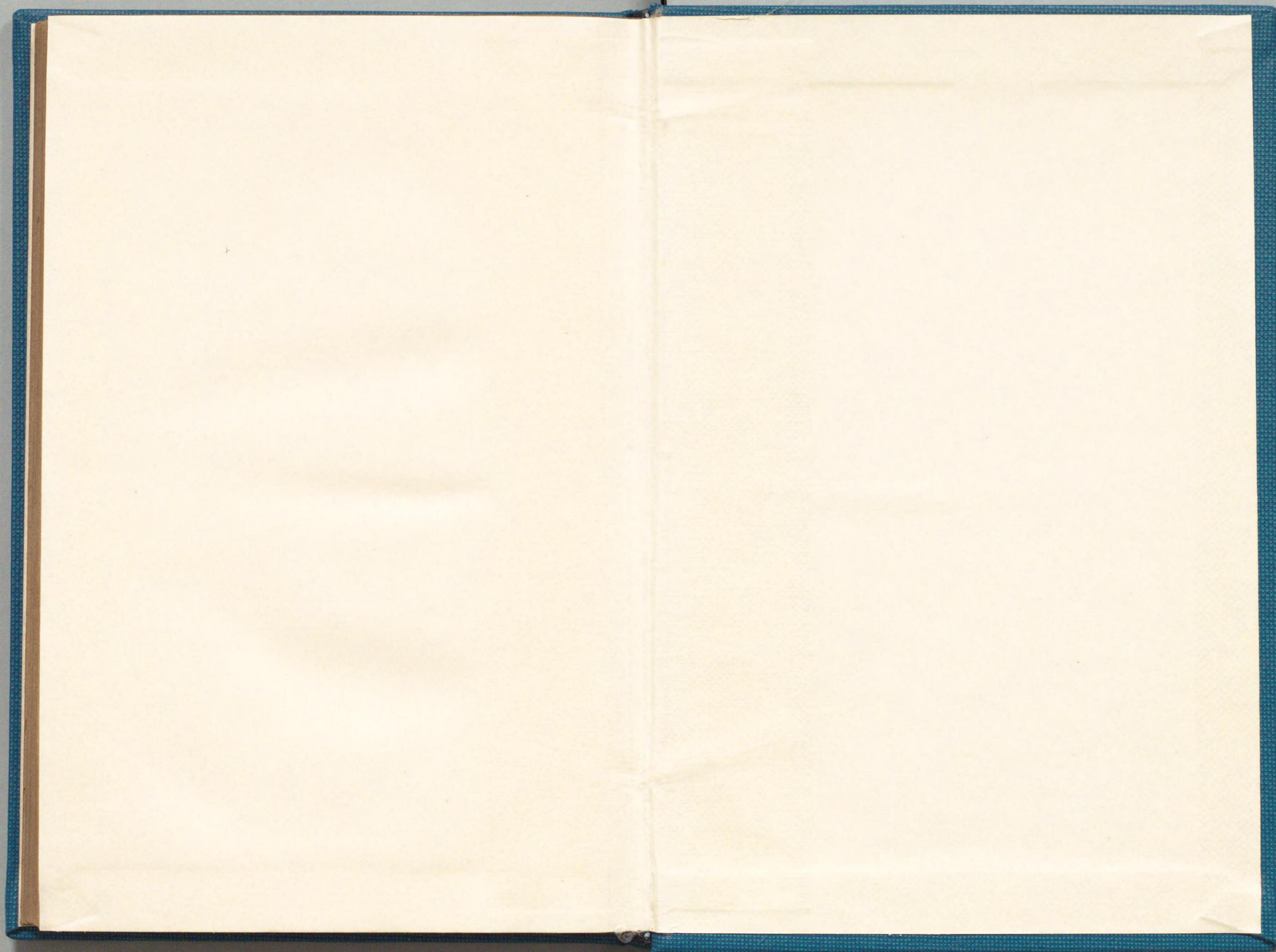
E9



79W28891

茶
複
写





1-7A-63



迷信
と
邪教

中村古峽著



東京神田
國史講習會



HK25
E9



79W28891

小引

一、世の物知りの先生たちが筆を執る場合には、易を云へば必ず支那の古代思想に遡り、占星術を説けば必ずカルデアの文化に戻り、博引旁證、氣の弱いものは眼を廻すほどの文献を並べ立てるが常だ。然し道樂としての迷信研究ならいざ知らず、打破救済を目的としての迷信研究に、かゝる無駄道をうろつく暇ありや。

一、余は全然余の立場で此の書を書いた。迷信者の心理には必ず何かの根がある。物知り先生の対象だから信するのではなくて、彼等自身の琴線に於ける要求に合する甘さがあるから信する。甘いから腹をこわす。その根を直ちにぐつと掘む、さうして思ひ切りの荒療治を施したい。これが吾人の本願である。こせくと枝の先を茹るやうな仕事は、この根を一思ひに切つてしまつてからのことである。それでなければ、いつまで行つたつて害毒の樹を枯らすことが出来ないからである。要するにこれから

の迷信打破の本舞臺は、余等の活躍する場所でなければならぬことを、余は此の書の中で思ふまゝに云つてのけた。

一、然し余は此の書に於て、まだ初めの期待の半分も盡せなかつた。荒削りにざつと一筆したゞけで、細かい點まで入つて行かれなかつた。これは紙數に制約されなゝめでもある。また材料が整はなかつたゝめでもある。他日には、更に生きた事實を集めて大成したい希望を持つてゐる。それまでのつなぎとしてゝも、此の小冊子に於て余の立場を思ふさま開陳し、多くの人の是正を受ける好機を與へられたことは、發行者に對しても一般讀書子諸賢に對しても感謝に堪へぬ次第である。

大正十年十月

著 者 誌

目 次

第一章 現代生活と迷信

一 文明の世にも迷信……………(一)

二 迷信の類別……………(六)

第二章 迷信の種々相

一 豫兆に關する迷信……………(一九)

二 禁咒に關する迷信……………(三二)

三 動物に關する迷信……………(四二)

第三章 迷信の心理

一 自己保存の本能……………(五)

二 動亂と錯誤と聯想……………(五三)

三 年齢と素質……………(五七)

四 宗教性妄想者……………(六一)

五 邪教の中心人物……………(六六)

第四章 迷信と宗教との關係

目 次

一 科學と宗教……………(七一)

二 宗教の還元と墮落……………(七四)

三 宗教の昇天と迷信……………(七七)

四 邪教の宗教的内容……………(八〇)

第五章 迷信と道德との關係

一 迷信の功罪……………(八六)

二 迷信と社會道德……………(八八)

三 迷信と個人道德……………(九五)

第六章 迷信退治の問題

一 信長と秀吉の逸話……………(一〇三)

二 権力者の壓迫……………(一〇五)

三 權勢者の惑溺……………(一〇九)

四 心理的根據の確立……………(一一三)

五 當面の策……………(一一九)

迷信と邪教

中村古峽 著

第一章 現代生活と迷信

一、文明の世にも迷信

文明が進歩するにつれて、迷信はなくなるものであらうか、なくならぬものであらうか。理窟から云へば、勿論迷信は絶滅されなければならぬ。文明といふものの本来の意義は、吾人の生活を充分に進展させて行くために、合理的な手段を發見する努力を云ふのであるから、さういふ合理的の手段から見れば、迷信の如きは不合理極まる手段であり、一も二もなく破壊しなければならぬのである。けれども事實は必ずしも理論の通りに行つてゐない。空には飛行機が飛び、地には自動車走り、昔の人達が

豫想しなかつたやうな事が實現される世の中になつても、迷信は依然として亡びない。歐洲ではスピリチュアリズムが相變らず行はれ、日本でも妙な信仰や祈禱が舊の如く勢力を持つてゐるのは、之等の事實を語るものでなくて何であらうか。

さういふ事を考究するには、先づ迷信とは何ぞやといふ問題から定義して掛らねばならない。余の立場からすれば、迷信は一種の判断の錯誤に基くもので、その時代の科學又は一般的の知識で、眞實でない或は合理的でないと分つてゐる事を信する現象である。例へば、昔は雷電は一種の鬼神が太鼓を鳴らして雲の上を駆け廻るから起る現象で、それが地から駆け上るために樹木などに傷をつけるのが落雷であると考へた。成程、落雷した樹木の皮が裂けてゐるのを見れば、鬼神の爪で引搔いたやうにしか見えぬ故、知識の程度の低かつた昔の人が、それを鬼神の所爲と見たのは無理もなからう。然しその後の學者の研究によれば、雷は電氣の作用であり、その電氣は如何なる性質を持つてゐるものであるかといふ事が分つて來て、それを種々な仕事の上に利用

する事まで考へられるやうになつた。かういふ時代に於て、イヤ雷は雷様が雲の上のゐるから起るのであると頑張るのは、即ち知識に反した信仰であるから、迷信であることはいふまでもない。

文明といふものは、前にもいふ通り吾人の生活を進展するための努力であるが、それを爲すには、吾人の生活を取り巻くすべての現象に就いて、未知を既知に變ずるといふ骨折りが重大な要素を爲してゐるのである。即ち換言すれば自然の征服である。吾人の生活の周圍に、性質も本體も知れぬものがあつては、それを制御し利用することが出來ず、従つて吾人の生活そのものも安全であることが出來ない。昔の人は雷の本體を知らないために、ただ之を恐れるばかりで、その生活は雷のために脅かされて不安全だつたのである。然るに今日は雷の本體を明かにしたために、それを利用して、吾人の生活を安全に豊富にすることが出來るやうになつたのである。

けれども吾人は人類であつてその知識は或る程度まで制限されてゐるが、自然現象

は廣大にして制限のないものである。人間が如何にその知識を活用して行つても、その制限なき自然界のすべてを知りつくすことは出来ない。科學は多くの未知を既知にしたけれども、然し未知は決して盡きたのではなく、多くのものが残されてゐる。また或る未知が既知に變ずると共に、新しい未知が後からくゞと出て来る。その残されたり新生したりした部分を、吾人は如何に取扱ひ、如何に解決すべきかが問題である。それは科學であり、哲學であり、また宗教である。

然るに今日の文明なるものは、この科學的方面のみを異常に發達させた畸形兒である。科學のみを唯一の方法としてたよつて來たのであるが、然し科學はすべての解決を與へるものでなく、前にも述べたやうな多くの、未知を残した。その未知を如何に處理すべきかに迷つた時、哲學や所謂宗教の訓練を経てゐない物質文明は、此處に破綻を來たし、狼狽し出したのである。さうして、自己の知識に裏切つた事實を信仰して、一時を糊塗しようとする。そのやうな彌縫が萬全を期し得ないことは、固より明かであるから、その破綻は益々大きくなるより外はない。

先年の大戦争を物質文明の破産なりと見る余は、迷信の潜勢的流行をも、また物質文明の破産の結果なりと斷言して憚らない。固より科學の進歩を無用なりとするのではないが、それが精神的文化と相伴はない、即ち哲學的統一なき支離滅裂な進歩であつては、何の効用もないことを確信するのである。

而してまた、從來の所謂哲學宗教なるものも、相當の進歩發達を遂げて來たのではあらうが、それも科學と同様な弊に落ちてゐた。即ち、科學と結び付き、それを支配する時、本當の秩序整然たる文化が成立すべきであるのに、今まではとかく科學を蔑視排斥したために、それは徒らに高遠の理想たるにとどまり、俗人の近づき難きものとなつて、何ら吾人の生活に實効を現はす事が出来なくなつた。また一方宗教なるものは、それが科學的知識と結びついて、その信念を修正して行く筈のことを怠つたため、哲人が高尚なる推理のみに耽つて近づき難いのに絶望した民衆と接觸するため、

科學に反した信條を取り入れて利用した。その最も多く用ひられたのは病氣を宗教によて治癒せんとすること、之が今日までどの位の弊害を及ぼしたか知れない。かういふ風に、精神文明の缺陷もまた迷信の流行を助長するに與つて力があつた。

かく色々の原因、理由があつて、前代からの弊害が重り合つて來てゐるために、文明時代と稱せられる今日に於ても、豫想外に多くの迷信が行はれてゐるのである。それを忌憚なく剔抉して、その弊害から一日も速かに免れることは、吾人文化人たるものの第一の任務でなければならぬ。

二、迷信の類別

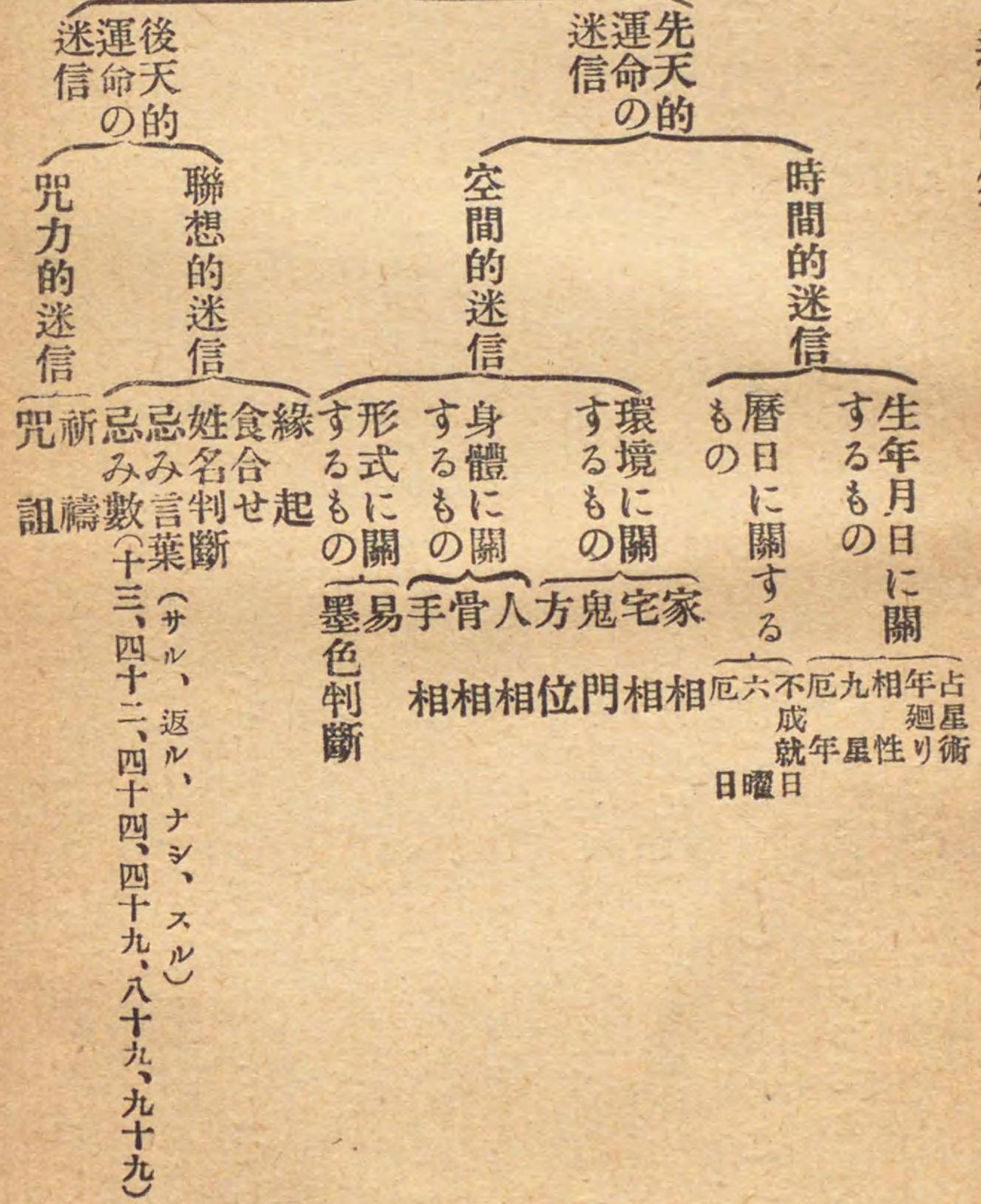
文明生活に入つても迷信がなくならぬとすれば、それではどんな迷信が行はれてゐるのか、それを明かにして、以てその撲滅策を考究しなければならぬ。尤も、迷信を前のやうな定義で概括する時は、少し範圍が廣過ぎるから、もつと嚴密な意義に確定して置く必要がある。即ち前のやうな意味に於てすれば、いろ／＼な場合も含まれて

例へば科學を迷信するとか、政治に迷信するとかいふやうな言葉も出て來るほどである。然しそれは、本來は誤信とでも名づくべきほどのもので、迷信といふのは言葉は宗教的の迷へる信念に名づけたものである。従つて吾人が茲に問題としてゐるのも、宗教的にいふ迷信を意味することは元よりいふまでもない。

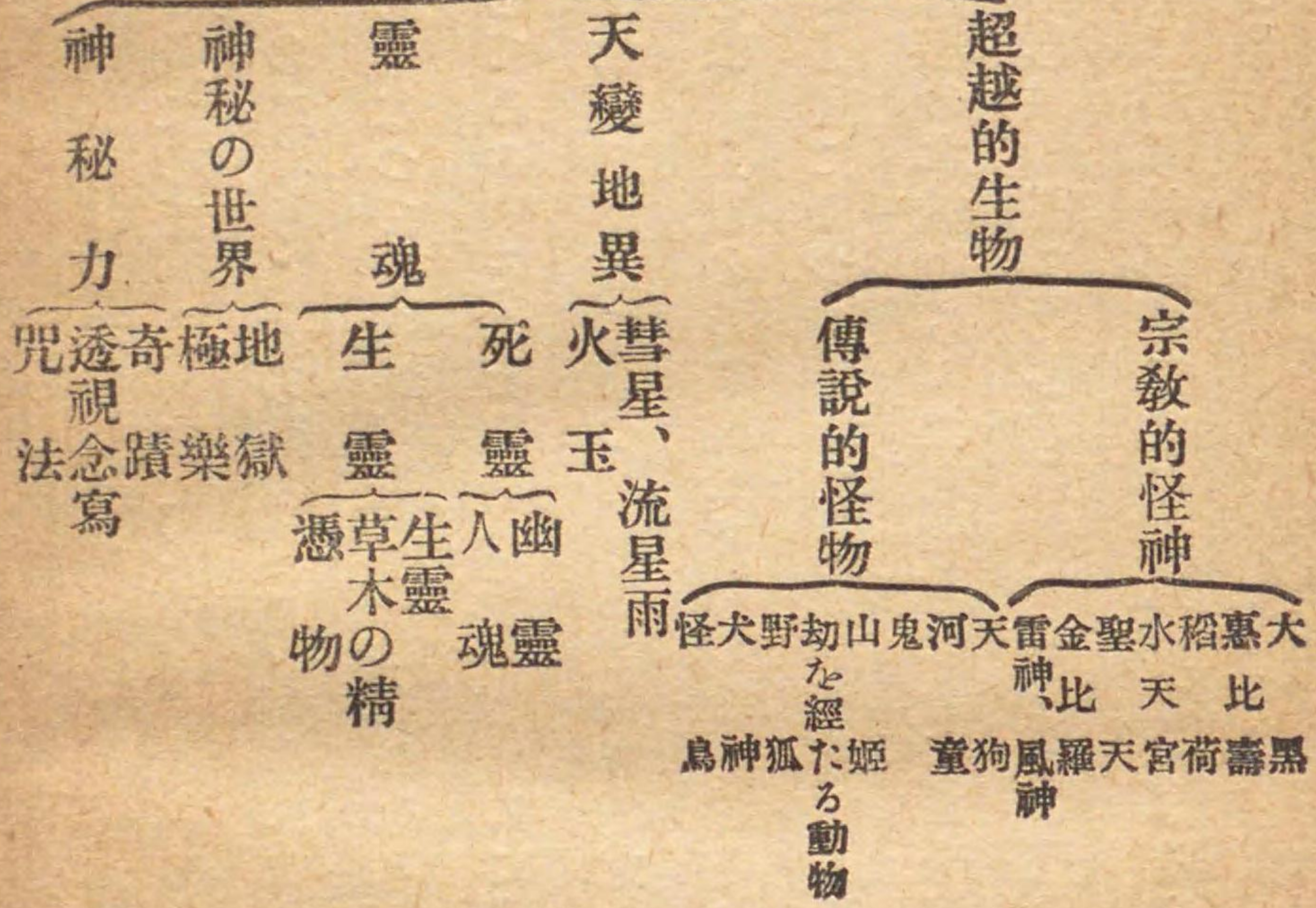
どんな迷信があるか。分り切つたやうで、さて一寸分りにくいものである。迷信が大仕掛になり、それを利用して中心人物が活動するやうな場合は即ち邪教であるが、その大きな邪教迷信から、小は神棚の隅にちよつと載せて置くやうなものに至るまで種々ある。東京にはあつても大阪になく、日本の本土にはなくても琉球、臺灣へ行けばあるといふやうな、地方的にかたよつた迷信もある。むかしは廣く行はれてゐたが今は社會の一部にしか行はれてゐないものもあれば、またその逆に行つてゐるものもある。上流階級のみに行はれるものもあれば、下流階級のみに行はれるものもある。さういふ風にいろ／＼な變遷流動が行はれてゐるから、一概にいふことは出來ないが、その大

體をとつて、迷信の外面的形式により、余は次の如く分類して見た。

運命に關する迷信

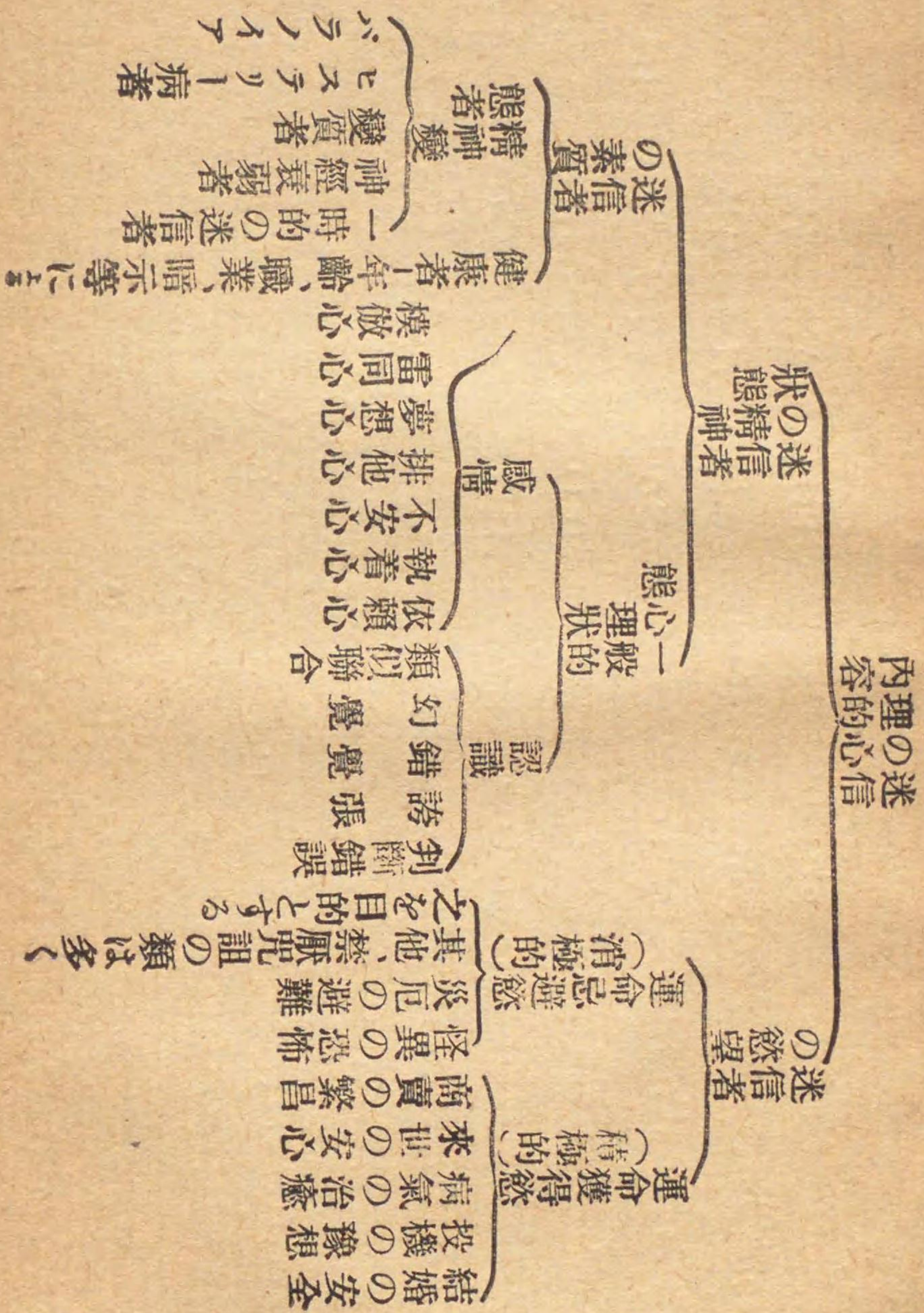


怪異に關する迷信



これは、現在一般に行はれてゐる迷信の形式と名稱とその性質とに従つて、それを色分けして見たのである。之によると、迷信の大體は運命に關するものと、怪異に關するものとの二種類に分ち得ることが知られる。運命に關するものは、自己の運命が先天的にどうなつてゐるか、後天的にそれをどうしたら動かし得るか、といふ希望が土臺になつてゐる。そこで、自分の生年月日に關し、曆日に關し、環境に關し、身體に關し、また或る形式によつて、之を知り、之を動かさうとするのである。自己保存といふことは、人類の根本觀念であるから、それが科學と結びついて左右し得ない時には、斯る迷信によつて僅かに安慰を得ようと試みるのである。怪異に關する迷信もこの自己保存の本能から來た未知界に對する恐怖の情よりして、自然に對し、靈に對し、神に對し、神秘に對し、恐怖の眼を以て見、以て之を説明し回避せんと試みる。之らの多くは科學的解釋によつて氷解すべきもので、それを今日に信するのは迷信だからである。

然し以上のやうな分類では、まだ余の云はうとすることは充分に出てゐない。何故ならば、迷信の外面的形式のみに従つてゐたのでは、充分にその能作を知ることが出来ないからである。同じく祈禱と云つても、神と人の交通を目的として、暗々裡に偉大なる神靈の感得に達しようとする高尚な自覺に基づくものもあれば、それによつて金錢慾を満足せしめようとする下賤なものもあるからである。即ち、それを祈求する人の心理状態の如何によつて、迷信の能作も違ふことが明かになる。それによつて、或る迷信が迷信でない場合もあれば、正信たるべきことが大迷信になることもある。市中を歩いてゐてよく氣がつくことであるが、有名な大神社で、迷信的な御符の類を出してゐる所が少くない。神社そのものを崇敬することは決して迷信ではないが、御符そのものを祈求する時に即ち迷信となるのである。それで、迷信者の心理内容に従つて分類して見れば、先づ假りに左の如きものかと思ふ。



迷信者の欲望は、先づその迷信に對する心的要求を意味するものである。すべて宗教なるものは、その信者の心裡に何らかの欲求があつて成り立つもので、例へば人生や世界に對する不安恐怖の念から、それに對する慰安を求めるために、一心に神を祈念するやうになる如きである。さうしてそれは殊に、この迷信の成り立つ根本要素として何時も強く働いてゐる。その欲求の動機として働く性質の如何によつて、迷信であるか正信であるかが分れる。正信者は決して神に對して、具體的の事物を要求しない。よかれあしかれ、すべてを神に委して、一心の祈念を捧げる。これが他力門の信仰である。然らずんば、神を客觀的に求めることなく、自我のうちにその本體ありと自覺して、その自我の修養に一心を籠める。之が自力門の信仰である。何れにしても神なるものに對して自己を謙虛に、一切を捨てて自から活地を得ようとする。そこに安心立命が成り立つので、物質慾などは全然頭にないのである。然るに迷信的信仰に於ては、その根本が物質的な欲望から來てゐるのであるから、自己を空しうすること

が出来ない。従つてすべての場合に自我に執着して考へるから、神に求むるものはいつも自己中心的な、眼前の欲望を満すものに限る。即ち結婚がうまく行くやうにと、相性やら厄年を氣にしたり、勝負事に利を得るやうにと、御幣擔ぎをするのである。これでは、祈られる神様の方が大迷惑である。また、積極的に或るものを得たいと欲求しなくとも、恐るべきものから逃れようとするために、科學的手段によつてその方法を講ずるのでなく、咒詛禁厭の類を以てその目的を達せんとするのは、即ち迷信的の欲望が消極的に現れた場合である。

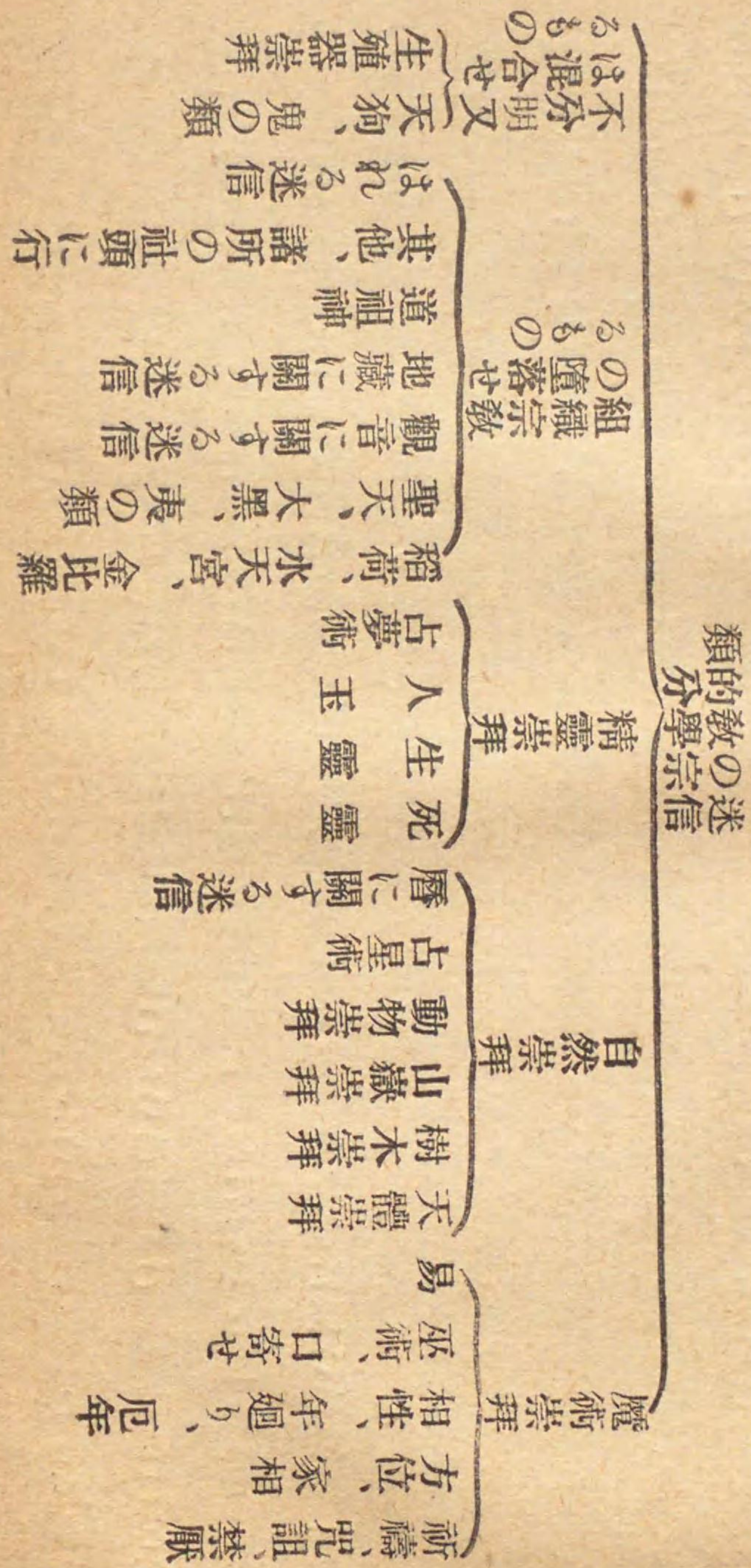
斯く迷信の根柢として欲望があるとすれば、それを働かす迷信者の精神状態を問題としなければならぬ。すべて健全なる精神の所有者に於ては、理性が健全であるからそれによつて欲望を整理することが出来る。達し難い欲望を満たさうと、無理な祈願に心を碎くことはない。然るにその理性が何かの事情で曇らされると、事理の判断を失ふから、即ち欲望を無理にも充足せしめんとして迷信に陥ることになる。理性が曇

らされることは、健全者に於ても、一時的に模倣や暗示によつて現はれることがある。然しそれは元より永久的のものでなく、説得や反證によつて直ちに矯正することが出来る。然るに、健全者でなくして、精神に缺陷を有するものになると、一時性の妄想、永久性の妄想、ヒステリー性妄想となり、更にパラノイアの如きに至つては、一生その迷信惑溺の状態を以て終らなければならなくなるのである。

この精神状態に關する考究は、余の記述の本旨であるから、後に詳論する。

更にまた現代の迷信は、もう一つ別の方面から觀察することが出来る。今迄述べて來たやうな、形式上からの分類にしても、心理上からの分類にしても、常にその迷信を行ふ上に於ては、その信念の對象を必要とする。殊に宗教迷信に於ては、宗教の本質が神と人の關係を律するもので、神なる客觀的主體の存在を必須條件とする限り、その祈念の對象となるものが、有形なり無形なりになくてはならぬ。而してその對象は、以上の分類には未だ判然と現はれてゐない。即ち例へば、獲得慾の迷信者は何を

信仰するとか、忌避慾の迷信者は何神を信仰するといふことが、それ／＼規定されてゐるわけではないからである。そこで、対象はまた対象として分類して見ると、次のやうな表示になる。之を宗教學上の分類とするのである。



魔術崇拜と自然崇拜とは、宗教の最も古いものなりといふ點に於て世界の學者の意見は一致してゐるが、何れが先で、何れが後であるかといふことは、また學者によつて説が違つてゐる。然し何れにしても、此の二種が先づ現れ、次に精霊崇拜の時代となり、それから今日のやうな組織宗教が組み立てられたといふことは、先づ定説といつてもよいほどになつてゐる。故に之は宗教の發達経路を示してゐるものであると同時に、また迷信の段階を示すものともいふことが出来る。

魔術崇拜にしても、自然崇拜にしても、それが行はれた當時の人にとつては、決してそれは迷信ではなかつた。何故ならば、當時の人はそれが最良の方法であると信じそれより外に方法はなかつたからである。然るにその後知識が進歩し、組織的倫理的の宗教が組み立てられたにも拘らず、之らの古い信仰が行はれてゐれば、勿論それは迷信である。精霊崇拜は組織宗教より迷信であり、魔術や自然の崇拜は精霊崇拜よりもなほ幼稚な迷信である。斯る古い信仰が遺存して、迷信となつて今日には未だに多

く存在してゐる。而かも古い年代を経てゐるだけに、いろ／＼轉化し混合し、何に根源するか分らぬものとなつて存在してゐる。而してまた、組織宗教にも墮落して在來の迷信と結合するものがあり、今日の迷信はなかく一朝一夕には苴り盡されぬほど複雑なものとなつてゐる。

以上の記述を概括すれば、迷信には先づ迷信者があり、その迷信の對象となるものがあり、此の兩者を結びつけるところの形式があることが知り得られる。この三者の關係は一般の宗教にも本質となつてゐるが、迷信に於ては前にも云つた通りに、その總てが錯誤の上に立つてゐるのである。この關係と本質とを考慮に入れて、以て吾人の文化をして意義あるものにすることは、吾人の重い任務なのである。

第二章 迷信の種々相

一、豫兆に關する迷信

吾人がある慾求をなす場合に、最も多くその動機となるものは、運命に關する慾望であらう。運命をよくしたい、よい運命を得たい、自己保存の本能がある限り、この願ひは止むところがない。さうして、智力でその目的を達することが出来ぬと感ずる時は、反理性的な手段に縋つてなりともその目的に近づきたいと努力する。故に此の迷信の期するところは、未知を理智的に知らうとするのではなくて、未知を勞せずして知らんとするか、又は知らぬままに利用して自分に都合のよい運命を作らうとするにある。頗る自分勝手な、我儘な性質のものである。

此の目的を達するために、此の迷信は豫兆と咒詛との二種の手段を用ふるのが通例である。前者は消極的に運命を豫知せんとし、後者は積極的に將來の運命を作り出さ

うとする努力である。

豫兆を得るためには、人はあらゆる方面に假托してこれを行ふ。その最も普遍的に行はれてゐるのは、所謂卜占である。

日本で文献に現はれた卜占の最も古いものは、「古事記」神代卷に「爾天神之命以、布斗麻邇爾卜相而詔之云々」とあるのがそれである。これは伊邪那岐、伊邪那美二神の子生みの段にある句で、二神は柱を廻つて御合になつたが、女神の方で先に聲をかけた時に出來た子は、蛭子や淡島で役に立たぬものだつた。そこで布斗麻邇即ち占ひを立て、天神の意を御伺ひすると、女神が先に言葉を發したのがいけないといふ託宣が現れたのである。斯く占法は、非常に古くから行はれてゐた。少くとも「古事記」の書かれた時代にはあつたことが窺はれる。

布斗麻邇の占法がどんなものであつたかは明かでないが、天孫降臨の砌り牡鹿の肩骨を灼きたまひしといふ、鹿卜の法は今に知られてゐる。それは牡鹿の左の肩骨を百

日間土中に埋め、雨水に晒して膏氣を抜き臭ひを去り、長さ三寸廣さ二寸に刻み頭部を圭形にして裏面を砥で磨く。さうして波々迦木ははかぎを焼いて、それでこの骨の裏を灼く。トふ事がかうなればかういふ形に、あゝなればあゝいふ形にと祈請して、骨の割目を見て占ふのである。

この鹿卜は、支那の龜卜法とよく類似してゐるので、一般にこの龜卜が日本に入つて鹿卜となつたのではないかと信せられてゐる。少くとも、後代になるほどこの兩者の卜法が混同して來たことは疑はれない。即ち、卜部うらべといふ一定の役所まで出來て此の事を掌つた。彼等は卜事を行ふに當り、七日七夜の齋籠をしてから卜庭に竹廿株、陶碗四個、斧二柄、甲堀かふこつ四本、刀子四枚を備へ、卜部神に祝詞を捧げ、降神の咒を誦みながら龜の甲を長さ三寸廣さ二寸ばかりに切り、裏は手斧で二寸ばかりに削り、小刀の尖で筋をつけたのを左の手に持つ。それから箸の太さの波々迦木を火中に入れて燃やし、急に吹き消して龜の甲を焼き、咒文を唱へながら割れるまで續ける。さうし

て最後に割れると、その形を書物に照して判断するのである。

琴占といふのは、琴を以て行はれた占法である。御巫が神前に琴を据ゑて座し、「不淨事疑、於御前占清々令占定々恐申」と聲高らかに唱へ、笏で御琴を三度搔けば、神靈が琴の上に降り、御巫に憑つて神意を告げ給ふのである。即ち、神主が斯々の事と尋ねると、神も同じことを繰り返すが、その聲音の澄めると濁れるとによつて、吉凶を判断するのである。

その他、粥占、竇占、米占、石占、錢占、灰占と、古代の卜法は數限りなくある。最も優美な占法は歌占で、謠曲に依れば伊勢の北村なる占法名譽の人が専ら行つたものださうである。之は先づ三尺ばかりの木弓に、左の八首の歌を記した短冊八枚を結びつける。

ますかゞみ底なるかげにむかひゐてしらぬ翁にあふこゝちする
年をへて花のかゞみとなる水はちりかゝるといふを曇るといふらむ

末の露もとのしづくや世の中のおくれさきだつためしなるらむ

ものゝ名の所によりてかはりけりなにはのあしは伊勢のはまおき

鶯のかひこの中のほとゝぎすしやが父に似てしや父に似ず

千早振よるづの神も聞こしませ五十鈴の川の清き水音

北は黄に南は青くひがし白にしくれなるにそめいるの山

ぬれてすす山路の菊の露の間に散そめながら千代も經にけり

かくて御巫が無念になつて弦を鳴らし、第一に手に當つた短冊の歌を讀んで吉凶を定めるのである。

占法も初めは鹿卜、龜卜の如く嚴重な道具立てを要したものであるが、次第に卜占が民衆化して來ると共に、それらの嚴かな占術は宮廷の儀式として保存されるだけになり、民衆の間に於ては極めて手數のかゝらない占法が行はれるやうになつた。即ち彼らは、日常の一寸した事に托して占ひを行つた。例へば或る場所まで歩いて行つてその歩數で占ふ足占とか、橋の袂に立ち往來の人の言葉を聞いて占ふ橋占、路傍の草

を結んでその解ける解けないを見る草占、水の中に繩を張つてそれに引掛るものを見る水占といふやうな類ひである。かういふ事は今日でもあるもので、電車に乗つて男が多ければ吉、女が多ければ凶とか、木に石を投げて當れば吉、當らねば凶とする。余なども學校の試験に苦しんでゐた頃は、道を歩きながら何人目に出會ふ人が男なら吉、女なら凶などと定めて、よく獨り占ひをし、氣に食はぬと何度でもやり直し、何回目かにやつと氣を濟ました覺えがある。

總じて之らの占法は、全然關係のない事に意味を持たせてたよらうとするのであるから、その現はれる豫兆なるものには全然意義がない、牽強附會である。ただ之を心理的に見た時、その吉兆が出た場合には喜びのあまり元氣が充實してゐるから物事が成功し、凶兆が出た場合には意氣消沈して思はぬ失敗を招くといふ事はあり得る。であるから、吉兆ばかり多く出るやうにして置けば、元氣鼓舞の材料になることもある。然し、吾人が意氣を充實し安慰を得るに、斯る偶然性の豫兆に依頼するのは既に

末である。知識の充實、それが最も確實安全なのであるから、斯る占法迷信にたよることは耻ぢなければならぬ。

夢に托することも此の種の迷信として擧げなければならぬ。例へば天に昇るとか、雷電に撃たれるとかいふ夢は大吉の前兆としてある。月日が落つると見れば父母を失ひ、霜の降るのを見れば悪い事がある。雲が四方に起ると見れば商賣事よく、雷鳴を聞くと見れば立身し、朝日昇ると見れば出世するが、雲が舞ひ下ると見れば病人が出來、風吹くと見れば病氣になるといふ。初夢に富士山を見ることが大吉なのはよく知られてゐるが、海を渡るとか、水を汲むとか、また地震を見るのも吉兆とされてゐる。動物では、鷹が大吉で、その他蝙蝠も蛇も熊も皆吉兆にされてゐる。夢は吾人に最も卑近であり、またいろ／＼な内容を持ち、而かも夢なるものが一般人には不可解の現象であるから、かういふ風に各種の俗傳を生み出したのであらう。

心理學の大家たるフロイド教授は、精神分析學を創出したので有名な人だが、夢を

分析研究した結果、夢にも意義があることを發見した。即ち氏の意見に據れば、人間にはいろいろの欲望があつても、社會の道德や禮儀等のためにそれを思ふまゝに遂げられないことがある。斯る時その欲望は吾人の精神界に壓抑されて出口がないため、夜間の睡眠中夢に出口を求めて現はれて來る。だから夢は吾人の欲望の無意識的表現だといふのである。さういふ事は吾人の實際事實によつて證明することが出来る。例へば夢中に欲しいものを得たり、行きたい所へ旅行する如きであつて、屢々吾人が經驗することである。斯く解釋すれば夢にも意味があるのは事實だが、然し之を逆に、だから夢には必ず何らかの意味があると考へるに至つては、また迷信への逆轉である。夢には意味のあるものがあるが、然し隨分意味のない下らないものもあるのだから、夢に必ず意味があると云つてその意味を尋ねようとすれば、それは昔のままの夢占と何の異るところもなく、知識に反した大迷信になつてしまふのである。俗傳の矛盾は斯る所に多く存する。

豫兆によつて安慰を得ようとすることは、文明を誇る歐州人にも免れない缺點と見えて、數多く今でも行はれてゐる。アストラ・キエロといふ人の書いた「豫兆、縁起と迷信」(Astra Cielo: Signs, Omens and Superstitions, 1918.)といふ小冊子の中には、此の種の俗傳が澤山集められてあるから、その二三を次に抜いて見よう。

一度家を出て、忘れ物のために戻るのは不吉である。だから、また出て行く前には、暫く坐つてゐなくてはならない。

パンの皮をポケットに入れて歩くのはよい事で、繁昌すると信せられてゐる。

食事中に食物を口から過つて落すのは不吉で、病氣を意味する。

曲つた錢や穴のあるのは、吉運として持たれる。だから英國には曲つた六片貨が普通である。

四葉のクローバーが幸運の記しといふのは、日本でもよく知られてゐる。之が見つかると襟や上衣に挿して置く。之は、むかしエヴが樂園を追はれた時、四葉のクロー

バーを持つて出たからである。

人が或る日によい事があり、それが三度續くとそれはその人にとつての吉日となり、どんな仕事でもその日にする事は成功すると考へられる。反對に、ある日に不運が三度繰返されると、仕事でも旅行でもその日には避けるやうにする。

宗教心ある人は、十二月の最後の月曜を不吉の日として、重要な仕事を避ける。それは此の日にキリストが賣られたからである。金曜日にも彼が磔刑された日だから忘む。若し金曜日が月の十三日に當ると、二重の不吉日としてゐる。

閏年の二月廿九日に生れることは吉で、その人は投機師として成功する。

占星術によると、次の諸日は不吉とされる。

- 一月 一 二 四 五 十 十五 十七 廿九
- 二月 八 十 十七 廿六 廿七 廿八
- 三月 十六 十七 廿

- 四月 七 八 十 十六 廿 廿一
- 五月 三 六 七 十五 廿
- 六月 四 八 十 廿二
- 七月 十五 廿一
- 八月 一 九 廿 廿九 卅
- 九月 三 四 六 七 廿一 廿三
- 十月 四 六 十六 廿四
- 十一月 五 六 十五 廿 廿九 卅
- 十二月 六 七 九 十五 廿二

この日に大切な事業を企てると、不幸や災難を招くといふ。

なほむかしの占星者によると、病人に危険な日が六つあり、その日に血を流すことをしてはならぬ。それは一月三日、七月一日、十月二日、四月三十日、八月一日、十

二月卅一日である。

正月にいろ／＼な迷信があることは日本でも普通だが、外國でも盛んだと見える。英國では元日の最初に鬮を跨いだのが男であると幸運を示し、女であると凶運が來ると云はれてゐる。だから、男子又は男兒を雇つて、居住者の起きない前に跨いで入らせるやうにし、此の目的の爲めに、多くの人が少しの金で雇はれるのである。また、最初に入つた人が黒髪の方が、金髪よりもよい。獨身者は既婚者よりもよい。寡婦はいけない。

元日には、何かの物が運び込まれないうちに、家から品物を持ち出すことは悪い。だから訪問者はみな細かな贈物を持つて歩く。こんな事をやかましく云つてゐたら、元日には何にも出來ないであらう。

また宗教的の儀式がある昇天祭、復活祭、降誕祭、聖燭節、萬聖節などに関しても、それ／＼してよい事と、して悪いこととの俗傳迷信がある。

此の様なことは、並べれば限りがないが、いづれも吉凶の豫想を得たいといふ慾望に於ては同じである。

支那から古く傳へられた易なども、所謂其道の學者と稱する人に云はせると難かしい理窟を説く。成る程易の卦なるものに、森羅萬象を寓意せしめるのはよいであらう。然し寓意はどこまでも寓意であつて、森羅萬象と卦との間の必然的有機的關係がある證據にはならない。その證據が擧げなければ、卦が必ず森羅萬象の實際運行を現はしてゐると云ふことは迷信である。近頃科學者の側から易の原理を究明して、蓋然律であるとした。元來吾人の煩悶は、頗る餘計な分子を多岐多様に含んでゐるので、それらの剩分子を艾除して行けば、煩悶の純化された真髓ともいふものが出て來る。それは右か左かといふ究竟の立脚地で、それを定め難い時に易に問ふ。斯かる時に、易は始めて意味をなすので、右でも左でも上でも下でも前でも後でも、どこへ行かうかと迷つて尋ねるのでは、正しい方向に當つても偶然で、當らないのが普通であり、易は

意味をなさない。余の考へも大體此の通りで、今の世に易が行はれるのが不思議な位に思ふ。

二、禁呪に關する迷信

運命に關する迷信に於て、運命のあるがままに満足せず、進んでよい運命を作り出さうとし、または或る運命を避けんとするのが此種の迷信で、これにも種々の形式や種類がある。その最も普通な形式は禁呪と祈請とである。

禁呪も卜占と同じく、かなり古くから行はれてゐたらしく見えるが、然し太古にはやはり一種の儀式として重んぜられたらしく、一般的の民間信仰として行はれたかどうかは疑問である。

禁呪が最も多く適用されるのは、肉體に關する場合である。むかし醫術が進歩しない時代には、病氣は人にとつて此上もない致命的惡運であつたので、それを避けるには神に縋り、その手段としてあらゆる方法を盡したのである。だから此の種の迷信が

最も廣く普及した。今日でも、醫術が進歩したとはいへ、まだ醫の及ばぬ病氣はいくらもあるので、此種の迷信は中々絶えないのである。吃逆しゃつぎを止めるには、本人の前で知れぬやうに、一枚の半紙を男なら左の方へ段々に折り重ねて左の膝の下に踏まへ、女ならば右の方へ折り重ねて右の膝の下へ布く。自分の吃逆を止めるには、冷水の中に寺の字を三度書いて三口に飲むか、茶碗の上に箸を一本渡してその水をそつと飲むか口を大きくあけて左の口中へ宗の字を三遍書くか、「休息萬命如律令くさめく」と云へばよいといふ呪まじなひがある。瘡おこりを落すに「一葉のおつるは舟のおこりかな」と書いて符となし早朝人の汲まない井戸水で飲むのは「おこり」の語呂から來た迷信であるが、その他、蟲の字を空に書いて早朝井戸水を汲み上げ「アピラウンケンソワカ」と唱へて飲むとか、朝東の方に向つて「上天下都城隍在」の七字を疊みかけて書くといふ呪法がある。咽喉に薊が立つたら「出雲國劍十郎左衛門子孫」と盃に書き水で溶かして飲むばよい。疣を落すには、七月七日に大豆を取つて三遍疣の上を拭ひ、南向の屋根の

二番目の溝瓦の中に植えて置いて、後熱湯を注いで枯らせばよいといひ、また蜘蛛の巣を疣に捲いて置けば落ちるともいふ。子供の寝小便を止めるには、一枚の半紙を子供の寢床の下の小便の當る所に布き、後に之を黒焼にして甘草五分を飲ませるといふ。子供の陰莖が腫れたのは、女の子に火吹竹で吹かせれば治るといふのは、どんな意味から來たのやら。

こんな簡単なものから、重大なものになると難産に關するものがある。紙に「伊勢」と書いて産婦に飲ませる。蓮華一片に「人」と書いて飲ませる。桃の種一粒を割つて一片には「可」、他には「出」の字を書き、合せて飲ませる。牛糞の中にまじつてゐる大豆を二つに碎き、一方に「父」他方に「子」と書き合せて飲ませる。また大豆を割つて、一方に「伊」他方に「勢」と書き合せて飲ませれば、男子は左手に女子は右手に此の大豆を持つて生れる。之らは難産を安産にしようとする禁厭である。こんな馬鹿げたことで難産といふ大事が片附くなら、醫術は要らないわけだ。痔の禁厭に、胡



瓜を年の數だけ買ひ、裏白に姓名書判を書き、河童大明神宛にして添へ流すのは、河童に尻子を取つて貰ひたいためであらうが、こんなことで痔といふ重病が治ると思ふのは、無智憐むべしといはねばならぬ。痢病には、七月立秋に西の方へ向つて汲立の水で小豆七粒飲むとか、七月十三日に廁を洗ひ清めるとか、木槿の花を味噌汁で食ふとか、無花果の枝を出口／＼に釣して置くとか、蛇莓を取つて端午の日の朝露で飲むとか、柘榴を黒焼にして五月五日の早朝人のまだ汲まない水で飲めばよいとか云ふ。

人事に關してもまた種々なものがある。先づ禍ひを拂ふことで、多くは或る悪魔の存在を假定して、それを攘ふ意味を寓してゐる。そのよい例は節分の行事で、「福は内、鬼は外」と豆を播いたり、柊や目刺めざしの頭を戸口に立てたり、みな鬼を逐ふ意味を現してゐることは人の知る通りである。桃の木の東南の枝を截り、それで棒杭を作つて家屋の四方の地へ打込んで置くとか、桃の木の枝か板かを門口にかけて置くとか、桃の實の冬になつても落ちないのをお守りにするとかいふのは、魔の祟りを除く咒法

である。桃が破邪の呪力を持つてゐるといふことは、支那の古代からも考へられてゐた思想で、日本でも古くから見えてゐる。暗夜に外出する時は、鬼に襲はれないために目籠を持つて出るか、又は「七里けつばい」と云つて行く。また夜中死人に逢つたら「たまやたかよみち我行、おほちたたちたまたた金ちりく」といふ。之らはいづれも魔や汚れを拂ふ目的のものである。

男女關係は人生の大問題で、而かも誰でも必ず苦しまねばならぬことなので、之に關する迷信もまた少くない。いもりの黒焼が思ひを遂げる秘藥であることは知れてゐるが、衣の袖を裏返しにして寝る。思ふ人の夢を見ることが出来、従つて思ふ人と添はれる呪法とされてゐる。思ふ人に逢へるやうになれば、くしやみが出たり、下紐が自然に解けたり、元結が自然に解けたり、眉根や耳の中が痒くなり、乗つてゐる馬が躓いたりするやうな徴候が現はれる。衣通姫の歌に「わがせこが來べき宵なりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも」とあるのは、蜘蛛が家内にさがるのは戀人の

來るしるしだといふことを詠じたのである。五月五日に鳩の脚骨を取つて紅の袋に入れ、男は左に女は右の手にかけてゐれば、夫婦の仲がよくなる。女房の嫉妬を止めるには鶯を煮て食はずとか、赤黍とくすたまとを丸藥にして飲ませるとかいふ。女房に姦夫があるかどうかを知るには、東の方へ行く馬の蹄の下の土を取つて女の衣服にそつと入れて置くと、必ず自分で白状するものだといふ。之らの呪法が語ることは、彼ら人類が戀の問題のために如何に悩み、如何にもがいたかといふことで、斯る苦悶の歴史の傍證として呪禁を考へるのもまた興味深い事である。

歐米人に於ても斯る問題に思ひ悩むことは同様である。或る國では、花嫁花婿が教會から出て來るとき、その頭を越して錢を投げる。これは幸運を占めるためである。曾てドイツでは、古い皿を何枚か持ち出して往來に叩きつける、若し一枚でも割れ残ればわるい記しとされた。花嫁に小麥を注ぐのはよいことで、場所によつて米に代へるものもある。これは子孫豊富の寓意と考へられる。結婚式の夜に靴下を投げるのは古

い習慣であつた。若い男たちは花嫁の靴下、若い娘たちは花婿のそれを取り、互に若夫婦の頭を越えて投げ換はす。若し花嫁なり花婿なりに、その持物の靴下が落ちれば、その投げた者は早く結婚するといふ。ヨークシャイアでは、夫婦の出で行つた後で、正面扉の前の石に料理番がバケツ一杯の熱湯をあける。これは、次の結婚式が早く来た此の家から出るやうにといふのである。結婚式に行くか歸るか途中で葬式に遇ふのはわるいことである。若し葬式が男のものなら花婿の早死を意味し、女のものなら花嫁が早死する。いかにも氣味の悪い話である。

結婚の日取に關しても種々な迷信があつて、歐洲古代の占星術は次のやうな日を吉日としてゐる。

一月 二四 十一 十九 廿一
 二月 一三 十一 十九 廿一
 三月 三五 十二 二十 廿三

四月 二四 十二 二十 廿二
 五月 二四 十二 二十 廿三
 六月 一三 十一 十九 廿一
 七月 一三 十二 十九 廿一
 八月 二一 十八 二十 三十
 九月 一九 十六 十八 廿八
 十月 十八 十五 十七 廿七 廿九
 十一月 五十一 十三 廿二 廿五
 十二月 一八 十九 廿三 廿九

これが何處まで効果を持つてゐるやらは、勿論眉唾ものである。

咒禁の更に複雑なものになると、巫術である。これは神と人の間に媒介者があつてそれに神を降憑せしめ、神意を告げさせて以て目的を達する術である。無智の民衆は

實際に神が憑つたと信じてゐるが、それは單なる人格變換の現象に過ぎないもので、神が憑つたのでも何でもない。人格變換は催眠状態の最も深い階段に於て現はれるもので、術者の暗示次第に神にでも他の人間にでもなる。さうして神になつた時は神らしいことをいふが、それはすべてその人の平常の神に關する知識を現はしたまでで、従つて知らないことはいい加減な空想で云ふのであるから、當ることもあり當らないこともある。死人の口寄せなどいふのもそれで、死人の靈が來て物語るのではなく、人格變換者の想像や記憶で云つてゐるのである。斯る現象は普通には現はれないのでたま／＼見せられると驚いて忽ちに迷信してしまふ。さういふことは、随分知識階級と云はれる人にも多いので、外國では大學總長たる科學者が降神術に盲信した例があるが、いづれも精神現象に對する知識がないためである。

今まで述べたのは咒禁であるが、また神に直接の祈請を籠めて目的を達しようとする迷信も多く行はれてゐる。その最も顯著な例は縁結びである。諸所の社頭の木の枝

に紙が結びつけてあるのは、やはり戀に關する人間の切實な悩みを語つてゐるものだから、また諸種の奉納物にも見られる。繪馬をあげるとか、髪を切つて捧げるとか、生殖器崇拜の淫祠では生殖器の形を造つて奉納するとかの如きで、これらは何れも神にあるものをあげてその利益を願ふのである。これらは神に對して商賣關係を持たうとするのであるから、迷信として排斥すべきであることはいふまでもない。商賣關係を最も露骨に表示したのは、願文にそれを明記したものである。例へば某所の地藏尊に「お地藏さま、お禮にとוגらしを澤山あげますから、百日せきをなほして下さい」とあつた。「鬼子母神様、可愛い坊やを早く返して下さい、お禮には百日お参りをします」とあるのは、子を失つた母の嘆きであらう。「廿九歳男、一昨年から耳聞えず大いに難澁仕り候、何卒貴殿の御利益を以て早々耳の聞ゆるやう御助け被下度願上候、全治の上は御禮として三年間章魚を斷候、蛸藥師殿」とあるのには、流石の藥師様も困つたであらう。「なむ地藏さま、こどもおじおりますよに御たのみ申候、どうぞ

「からだにさわりませぬよに、おたすけくだされ、なむ」とある勝手な願ひには慈悲柔和の地藏さまも怒りたくも泣きたくもあつたらう。

勝手な願ひ、そのために迷信者は無理な願文も書けば、汚い御符も飲み、お百度も踏めば、おこもりもする。それで彼等が果して救はれたなら、世界はもつと安泰な、無事な、さうして寝て暮せて働くのが馬鹿くしいやうなものでなければならぬ。

三、動物に関する迷信

動物に関する迷信は、大體を云へば文明人に少く未開人に多い。これは動物崇拜の名残りであるから、動物を驅使し利用する文明人には、斯る迷信はあまり遺存しないのである。此の點から云つて、人に憑く狐を初めとして、河童、天狗、猿、蛇等の不逞極まる怪動物を有する日本人は、あまり文明を誇ることは出来ない。

狐が憑くことは、日本では廣く普及してゐる迷信であつて、之が未だに退治されないのは情ない話である。狐憑きと云へば、祈禱師にかけて、鐵砲で脅したり、松葉で

燻したり、思ひ切り擲りつけたり、随分悲惨な眼に遭はせたものである。三河ではおとら、狐が人に憑くといふ話があつて、次のやうな云ひ傳へがよくあるさうだ。

「私が幼少の頃に七十餘で亡くなつた村の某と云ふ老人などは、おとらに取憑かれてゐて家の者も持てあまし村内の血氣なものが二三人づつ、交替で監視してゐたものである。魚が食ひたいといふと、生魚を皿に載せて出す。箸も何も添へないのである。すると病人が蒲團の中から首を出して、口を附けてかぢるのである。七十幾つの齒も無い老爺が、魚の頭から骨まで何一つ剩さずに、ぱり／＼と音をさせて食べてしまつたといふ話である。一般に取憑かれた者は瞳が失せるなどと云ふ位で、非常に物凄く相貌をして居る上に、始終狐の素振をするので、女や子供は恐れて傍へも行かぬのが常であるが、此の老人などは特に甚しかつたさうである。監視の者も、夜分は黙つて枕元に坐つてゐるが、晝間になると毎日々々出て行け／＼と繰返すので、之に對しそれでは赤飯を炊いてくれるなら行くといふ。仍で云ふ通りにすると、今度は油揚の辨當を拵へてくれと云ふ。次は車に乗せて村堺まで送つてくれればいやだと言ひ出す。随分残酷な話であるが、其病人を荷車に乗せて村堺まで送つて行つて、七十以上の老人を逆さにして振りはいたなどと云ふ話もあつた。それでもおとらは離れなかつたといふ」(早川孝太郎氏著「おとら狐の話」)

之は改めていふまでもなく精神病者で、狐といふ觀念が頭にあるために狐のやうな

舉動をするのである。昔でも物の分つた人はあつたもので、「一人狐辨惑論」の著者陶山尙廸の如き、また水野澤齋の如きそれである。澤齋の著書には次のやうな話が記されてある。

「先年京都松原通新町に松屋嘉兵衛といふもの食物の進事常人に異なり、二三年の後食物益々すゝみ、病日々に加はる、衆醫を轉に癩と云狂と云積と云留飲と云氣と云、治療を乞はば皆食禁嚴重なり、然に食物を控れば晝夜とも少しも寝れず、詮かたなきに陰陽家へ占を頼ば狐靈と云、教に従ひ赤豆飯一升三合と油揚豆腐三十枚を與るに一度に喰盡して前後を知らず寝る事一日一夜なり、彌々狐靈と定め祈禱中七日の間斷食にて御供水の外一切與べからずと云、喰てさへ空腹なる病人なれば斷食に耐がたく、六日目の夜に病人謀計を廻らしよく寝入たる體に見せかけ高軒にて居る、介抱の者は實に寢入しと思ひ祈禱の利益なりと悦皆々草臥て眠り臥す、病人此體を見て心に點頭高遣して臺所へ往き飯櫃に一ぱひある飯を何の苦もなく喰ひ盡し、本の寢所へもどり實に寢事一日一夜也、介抱の者が、る事とは夢にも知らず翌朝目を覺し、病人がよく寢入たる體を互に悦び先々飯を喰んとするに飯櫃に飯なし、是は狐が落て去がけの駄賃に喰ひて去しならんと祈禱者へも此由を告ぐ、然に七日目の夕方病人目を覺し食を食ること前日のごとし、又此趣を陰陽家へ告れば夫は狐歸りといふ者なり、復七日斷食させて祈禱を致せと云、家内の者も餘りの事と思ひ是より陰陽家を斷りて予に治を乞、診察すれば酸敗液也、一日に陳倉米二合を白粥にして五度に喰し、其間の食を好む毎に朱雀圓を與へ、附子粳米湯を用ゆる

こと三十日を待ずして治す、平愈の後嘉兵衛悦びて云、先生の診察一兩日遅ければ命を失ふこと必せり、空腹耐がたきゆゑ何がな食を求めんとおもふ折から、狐靈なれば食を興んといふゆゑ狐靈と答ふ、然に思ひの外斷食させられ迷惑いはんかたなく、故に狐靈にあらざる趣云聞せば、二親をはじめ妻子親類までもア、いふが狐コウ云が狐と何をいふても狐にして如何ともし難き所を明察に預り余の命を拾しといへり、強酸敗液になれば食を食ぼる事かくのごとし、始の間に養生法を修せば此患に罹ることなし」(養生辨卷之中)

所謂陰陽師なるもの、無智を見るべく、その時代にあつて狐憑を胃病と見た澤齋の識見は敬服に餘りある。

その他、信州のクダ狐の如き、オサキ狐の如き、土佐に行つては犬神、藝州で外道、備中邊のトウビヤウといふ蛇神、いづれも動物に關する迷信で、それも單に動物が現はれていたづらをするといふ類ひでなく、その動物の靈が氣となつて人に憑り、家筋に代々傳はつて怪異をなすといふ小氣味のわるいものである。之は思ふに、精神病などの系統ある家を、此の種の憑物持と認め、後にはさうでないものまで何かの折に一緒にされて、嫌はれるやうになつてしまつたのであらう。

かうした動物に關する迷信は、原始信仰の遺物であるだけに、未開の人種間には一層盛んに、しかも一層原始的な形で行はれてゐることが見られる。

北海道では、アイヌの生活と密接な交渉を持つてゐる動物は熊である。従つて熊に關する傳説が多く、熊を半ば神格化した迷信も生じてゐる。例へば、彼等が熊を狩るに際して、決して熊が寝てゐる所を射たない。睡眠中の熊を射つことは、山神かじむに對する大不敬罪であつて、之を犯すものは即座に山神の怒りを招き、何かの災害が身に及ぶものと信じ恐れてゐる。また熊のために人が殺された時などは、その死屍を殺されたままで野晒しにして置いて、復讐に苦心する。それを遂げるまでは、百年でも晒しっぱなしにして置くのが山神の心に叶つてゐるのだと信じてゐるさうである。(河合裸石氏著「熊の嘯」に據る)

朝鮮へ行けば名物の虎がゐるので、虎に關する俗傳迷信が多い。その一二を挙げれば次の如きもので、何れも虎に對する恐怖や避難を語つてゐる。

誰でも山の中で渴したる時「水が飲みたい」と云へば、虎が水の流るる音の眞似をなし、人が其處に行き水を飲まんとせば忽然虎が現はれて食ひ殺される。

夜中歩行する時、虎が後より追跡し來ることあり。其時家に歸り「御客様が來た」と云へば、虎は犬を捕へて歸り人を害せず。

虎が人を食ひたくなると、其家の便所に來て搔く。又虎に食はれる人は夜中屹度便所に行き度くなる。

虎は人を食ふ時、くわへて持つて行き、一度地に擲けて見、左に落ちると食はず右に落ちると食ふ。

虎は酔うた人を食はず、若し食はんと思ふ時は尾を水に浸して來り、酔人の顔を撫で酔を醒まして後食ふといふ。又寝た人も食はない。善行の人も食はず。

毎年九月に山神を祭られば虎が害をする。虎の夢を見れば男子を生む。虎の夢を見た時直ちに合歡せば男子を生み、成長の後武官となり出世する。又虎の夢を見れば虎の字が好の字と變じ、萬事好き事多し。

小兒老姑が靈纒に虎の爪に金銀細工をして佩用せば、災難を逃れ且つ天然痘疫病に罹らず。(今村軈氏著「朝鮮風俗集」による)

先づ此の様なもので、無數にあるらしい。之らの俗傳の中に貫いてゐる思想は、今村氏の研究によると次の五種に要約し得るさうである。

一、虎を全く神格化し、道德思想を有し、禍福を與へ善を賞し、惡を罰するの能力

ありとするもの、即ち神と同一に見るもの。

二、虎の猛烈なる害に恐れ、之を崇拜してなるべく機嫌を取り、其の害より免れんとするもの。

三、虎の威力を利用轉用し、他の害（悪鬼神、疫病）を免れんとするもの。

四、虎の猛威にあやからんとするもの。

五、虎には神格なく只山神の従者なりとするもの。

これによりて、彼ら朝鮮人の虎に對する心理状態を窺ふことが出来よう。

琉球へ行けば飯匙蛇いばしへびがあるので、それを除ける咒禁が行はれてゐる。

『藤原藤原どけなりさいなり、じやなうちすいうちまぐどろ、くわんじやちうぶかちしんで、千手觀音、あや斑あまじく、吾が行く道に立つならば、山邊の主に語つて聞かさうや、儀方』

と一息に口吟めばハブは直ちに逃げ去るといふ。この意味は、

『おれは田原藤太藤原秀郷だ、よけく南無阿彌陀佛、汝吾が行く道に防害をするなら、山の神様に訴へてやるぞ、儀方』

といふことださうである。（大正十年十一月十三日大阪朝日新聞による）

下つて南洋方面へ行けば更に變つた動物に對する恐怖があるが、ここには一例としてインドのセイロン島に住むヴェダ種族のそれを舉げて見よう。彼等の最も恐れる動物は熊で、これを敵として言葉にするさへ恐れてゐる。熊が近所にゐる時その話をすると、直ちに聞きつけてやつて來ると云ふ。險阻な山道をする時は、熊を避けるために咒文を聲高らかに叫びながら行く。これは藪の中の小道を黙つて歩いて突然熊に出會したり、蟻の塔の後を掘つてゐる熊を驚かしたりすると、非常な傷を負はせられることがあるからだ。ベイレイ氏は「始めてヴェダ人が自分のために此の呪文を叫んで呉れた時のことは忘られない」と云つてゐる。「それは眞夜中であつた。私は厚い陰鬱な森の中にて、人家から甘哩も隔たつてゐた……私は伶俐なヴェダ人と話し、初め

て彼等に呪文のあることを知つた……私はそれを誦してくれと頼んだ。忽ちにして森はこの氣味のわるい號叫に反響した。私は彼が大膽な熊なのぢやないかと思つた。

『Behang! wiroowee! wiroowah!』と呪文の尻句に繰返す調子外れの叫びを聞いては、熊の心は死にもすまいし、遠くへ逃げ去ることもあるまいと思はれた。その効果については彼は疑はない。私も疑はない。然し私は、單なる物音の方が効果があるだらうと云つたら、彼は少し憤つた。」

彼等はまた、熊の骨を珠敷玉として腰に掛けてゐる。この熊の骨は藪の中で極めて稀に見つかるものであるから、貴重品として尊ばれ、賣ることも交換することも肯じなかつたさうである。はつきりはしないが、魔術的効力の思想があるらしいといふ。即ち一種の護身符である。

その他此の種族に於ては、象に對する呪文や、蛇、百足等に對する呪文がある。蛇に咬まれたときには、髪の毛で肢の傷の上の處を縛り、術者は呪文を唱へながら肢を

下へ撫でて親指の爪を地に弾かせ、幾度も之を繰返す。さうすると、毒は地に入つてしまふとされてゐる。傷の上を髪の毛で縛るのは、緊縛する意味ではなくて髪の毛に一種の特質があると信せられてゐるからであり、咬まれた當人のも他人のもよいとされてゐる。(Seligmann: The Vedas, 1911. p.191-201)

かういふ風に一わたり眺めて見ると、動物に關する迷信は最初動物に對する恐怖から初まり、その神秘力の假定、畏怖、崇拜となり、それからそれを忌避せんとし、最後には寧ろ利用せんとする傾向を帯びて來てゐることが知られる。

第三章 迷信の心理

一、自己保存の本能

由來哲學は驚異に始まり、宗教は恐怖に起ると昔から云ひ古されてゐる。その驚異恐怖は何であるかといふと、つまり我々が生を願ひ死を恐れるといふ本能の發露した

ものに外ならぬ。自己保存慾の表現である。我等が神とか佛とか或は偉大なる自然力とか宇宙現象の不可抗力とかに對して、畏怖崇拜の念を起し、これに阿諛しこれに信賴し、以て福を求め禍を去らんとするのもすべて皆この自己保存の本能に基くものである。

斯る本能の表現は、原始人にあつては單に彼等には説明の出来ぬ不可思議な現象を恐怖し崇拜するだけであつた。そこから自然崇拜の幼稚な宗教が発生して來るのであるが、更に進んで來ると、單に恐れ拜するに留まらず、その危険を避け、または幸福を獲得する方法をも講ずるやうになつて來る。即ちそこに魔術が現はれ、延いては近代の科學にまで進化して來た。然し今日の科學にまで到達して來ても、なほ科學には不十分な點もあり、また原始思想の殘留してゐる破片もあるために、依然として非合理的な方法によつて本能を充足しようとする傾向が人々の心にある。これが、迷信を生み出す根本の動機となるものである。

自己本存慾が現はれるのは、前にも表示した通り、大體積極的のものゝ消極的のものゝに大別することが出来る。さうしてその何れにしても、人の力には及ばぬといふ形のものが多いことは争はれない事實である。自分の力に及ばぬと知りつつ希求するとき、人はそこに何らかの神秘力を期待する。一步一步に知識の眼界を開き、足を踏み占めて目的に近づかうとするやうな科學のやり方は、彼等には甚だ生ぬるいものである。一足飛びに目的を達しようとする、そこに一足飛びの方法があると考へる。迷信者の欲求は、常に夢想に始まつて夢想に終る。迷信に捉はれたる人の心理状態は、到底普通の常識を以て律する譯に行かぬ。そこで心理的の吟味が必要になつて來る。

二、動亂と錯誤と聯想

人間といふものは、自己の利害に關係のないことは比較的冷靜な判斷を下し、また比較的公正なる觀察を下し得るものである。處が一度自己の利害がそれに加はつて、或はその生命が危険に瀕するとか、或はその財産、名譽、地位などが危くなるとかす

ると、既に前にも云つた自己保存慾に支配されて、畏怖驚異若くは喜怒哀樂の感情を動かすがために、冷靜な判断と公正なる観察とを下すことが困難になつて来る。この動亂の心理状態がまた屢々迷信を生む動機となるものである。

或人が深山で一疋の怪獣に出逢つた。それは餘程珍らしい獣で、體は猪に似てゐるが、頭には角があり、尻尾が長く、おまけに眞紅な舌を出して火を吐いてゐたといふ。あまりの恐ろしさに一生懸命山を逃げ下りたところ、丁度その崖の下で、鐵砲を持つて隠れてゐた獵師がその獸を討ちとめた。それを見ると矢張り普通の猪であつて、頭に角などはなかつたといふ。

またこれは余が自ら經驗したことであるが、嘗て淺草へ南洋の大蛇が見世物に來たことがあつた。それを見て來た友人の話によると、何でも長さが三間餘りあつて、胴の太さは二尺に餘り、金盃のやうな頭を擡げて活潑にのたくり廻り、番人が投げてやつた兎を一呑みにしたといふことである。それは珍らしいといふので余も見に行くこと

成程長さは二間餘りあるが、番人の話によると、胴は一番太いところで一尺足らず、おまけに日本の氣候が寒いのでいちけて不活潑で、嘗て兎などを一呑みにしたことはないといふ。余は興をさまして歸つた。

これ等はすべて見る人が、その時々々の感情に支配されて判断を誤るからである。かういふことは子供や無智な人間或は神經質、また精神變調を來してゐる人ほど甚しいものである。中には病的虚言といつて、自分で嘘をついて置きながら自分でそれを事實と信ずるものすらある。世間でいふ妖怪變化を見たとか、或は夢の靈感があつたとかいふのは、大抵はかうした動機から出るのであつて、それがために迷信の流布されることもまた少くない。

更に我々の精神状態は、一方にその注意作用を集中する時は他方に於て空虚を生ずるものである。一生懸命に勉強してゐる時に頭上で時計が鳴つても、隣室から人が自分の名を呼んでも知らないやうなものである。激しく人と格闘してゐる時には、少々

位の怪我はまるで気がつかない。寄席で演ずる手品師や奇術師はこの心理を應用して或る事件に觀衆の注意を惹きつけて置き、その蔭で細工をするのである。それがため後で追想の不完全または誤謬が起つて、これがまたいろいろの迷信を惹起するものとなる。

また我々は一度或る特別の場合に或る事物に遭遇するとか、また或る經驗を嘗めるとかすると、それと同様の他の場合に於ても、また前と同様の結果を豫想したがるものである。例へば一度外出の途中で鼬が道を横切つて、その時出先までの結果が思はしくなかつたとすれば、その次に外出の途中でまた鼬が道を横切ると、以前の出先きの結果を聯想してそのまま引返したくなるといふ如きである。或はまた丙午の歳に生れた女に二三人淫亂の者があつたとすると、丙午の女はすべて恐ろしいものといふ類似の聯合からそれと縁組みすることを嫌ひ、それがため昔は丙午の歳には墮胎が非常に行はれ、今日でもなほ地方によつてはこの厭ふべき陋習が残つてゐるといふ如きである。

る。西洋でも金曜日の旅立ちをしたりまた招客するのを不祥とするが、これは昔キリストが金曜日に刑死したといふ聯想から來てゐるので、金曜日そのものには何の意義もない。歐米人が十三の數を忌み、日本人が四九などの數を忌むのも、一はキリストの聯想、他は發音の聯想から來たまでである。

俗に縁起といふものはすべてかゝる聯想作用または類似聯合から發生した迷信であつて、易だの、方位だの、姓名判斷だのといふものの中には、斯る卑近なところに材料を取つて拵へ上げたものが少くない。

三、年齢と素質

今まで述べたのは、一般人の心理状態について云つたのであるが、次には個人によつてその心理状態に相違があることを注意しなければならぬ。即ちその個人の教育、知識、年齢、性質、境遇等によつて種々に支配されるのである。

先づ生れたまゝの子供には迷信のある筈がない。それが段々年を取るに従つて、母

親や保母の口から早く寝ないとお化けが出るとか、夕方晩くまで外に遊んでみると天狗に攫はれるとか聞かされて、まだ思想の發達しない柔かい頭にその驚怖が根強く刻み込まれる。これがそも／＼迷信發生の源となるのである。

それから更に年を取つて十六七才の青春期に達すると、この年頃は誰しも經驗する如く、智力や判斷力はあまりに發達しないが、感情が際立つて發動し、従つて想像や空想が盛んとなり、且つ事物の科學的説明よりは寧ろその神秘的方面に憧憬する時であるから、この時代に宗教心を起すものが少くなく、その結果迷信に囚はれることも有り勝ちである。大抵の改宗者はこの年頃の男女が多數を占めてゐるのを見ても分る。それから更に年を取つて四十歳前後となれば、最早智力も十分に發達し、意志も鞏固となり、且つまた青年時代の空想や好奇心も漸次に收まつて、何事にも着實と温健とを尊ぶやうになるから、此年頃は人間一生の中で最も迷信の影響の少い時である。で多少のそれまで持つてゐた迷信をも自己の智力の判斷によつて脱離することが出來

るものである。但し青年時代から或る一定の迷信にひどく固着してゐたものにとつては、普通の場合とは反對に、この頃から益々その迷信に支配されて、終には宗教性偏執狂となるものもある。

更に老年になると、精神肉體ともに衰へ、徒らにに自我の念ばかりが強くなつて、一つの思考又は感情に執着し易く、更に死後の世界について煩悶することなどが自然多くなつて、それまでに健全な宗教信仰を確立してゐない人には、又々迷信の惑溺を見るものが少くない。

以上は年齢について云つたのであるが、次に男女の關係からいふと、迷信が男よりも女に多いことは勿論である。女子は概して男子よりも感情的で、智力少く、意志弱く、判斷力鈍く、依頼心強く、且つ僥倖を頼む念が多いからである。

また各人の教育及び素質について云へば、教育が十分にあつて身體の健康な者は比較的迷信に陥ることが少い。最も迷信の多いのは神經衰弱者、變質者、痴愚、愚直、

ヒステリー病患者等であつて、殊に精神病的の遺傳系統者にはこれが多い。彼の大本教などの熱信者の素性を洗つて見ると、大抵はそこに入る前に既に強度の神経衰弱をやつてゐたか、非常な變人であつたか、若くはヒステリーに悩んでゐたものであるのを見てもわかる。

また例へ十分の教育を受けた者でも、その教育が物質的に偏して、哲學、宗教、心理、病理等の精神的方面の素養の足りないものは、迷信に惑溺することが多い。これも余は大本教の信者に於て多くの生きた材料を掴むことが出来た。同教は信徒三十萬と稱されたが、その中の所謂有識階級者は、大抵は軍人、實業家、開業醫、理學者、判檢事、辯護士及び文學者等であつて、一人の哲學者や心理學者が入信してゐなかつたのを見てもわかる。

また職業について云へば、着實なをして安全な職業に従事してゐるものには比較的迷信が少いが、これに反し、非常に不安な危険を伴ふ職業に従事するものには迷信が多い。彼の羽田稻荷とか、川崎大師とかの熱信者が、大抵は相場師、請負師、藝娼妓等、投機的又は僥倖的の職業者に多いのは當然である。殊に泥棒やスリの仲間には、我々の想像だに及ばぬほどの様々な迷信が、強い勢力を以て蔓延してゐるのはよく此の事實を語つてゐる。

四、宗教性妄想者

更に深く、迷信者の素質を検べて見ると、先天的にさうした傾向を有すべき運命を負はされた妄想者がある。さういふ人は、既に幼時から信仰に對する強い欲求を持つてゐて、その信仰心が強いのは反對に、極めて弱々しい感情の持主で、感じやすく涙もろい性質である。現實を直視するに堪へず、常に神秘界に憧れ、わづかに慰めをやつてゐる。ジェームス教授も曾て云つた。「神秘的意識によつて強められた煩惱が、神秘主義に陥りやすい實際生活を作り上げるものだ。さういふ人に於ては、その性格が受動的であり、その智性が薄弱である。然し生來に強い精神と性格とを持つたもの

は、全く結果が反對である」と。薄弱性格者の信仰は、とかく理智の支配から逸出しやすい危険な状態にあるもので、多くの迷信者はこれであるといつてもよい。殊にその病的に強く現はれたものは、即ち宗教性妄想患者なのである。

これを實際について観察すれば分る。かの天理教祖として有名な中山美伎子も、やはり宗教性痴呆患者だったのである。浄土宗に歸依すること深かつた母の感化を受けて、幼時から信仰心強く、十三才にして既に出家を父母に願ひ、十五才の時「嫁入しても朝夕御經を上げたり、御和讃を唱へることを許されるならば」といふ條件附で親戚の男子へ縁附いた。慈善を行ふことを何よりの楽しみとしたが、その慈善にも前後周囲を顧慮せず、盲動的に行つたのである。三十一才の時名主の子を乳不足のために預かつて養育したが、その子が黒疱瘡に罹つた時には、氏神に百ヶ日の跣足参りをし、自分の女の子二人の生命を身代りにしても、また自分の生命を召されても助けたまへと祈願し、自分の子を他家に預けてまでも看護に手を盡した。その慈愛深い性質と

篤い信仰とは敬服に値するものであるが、すべてこれ理智の調整を失つた感情の行動で、見方によれば宗教的天才ともされようが、精神的の缺陷から來た熱情で、ヒステリーなどに現はれる熱中癖と同じである。斯る理智の統整を失つた宗教の篤信者が偶然に修驗者の祈禱を受けた事から人格變換を起して神憑状態となり「我は天の將軍である……元の神實の神である……世界一列を助けるため因縁の理により、しゅん刻限を以て今神が天降つた……此の屋敷は世界初めの源の地場、それで此地、此家、親子諸共に神が貰ひ受ける、異存はあるまい」と叫び出すに至つたのも、さうした宗教妄想がいよゝゝ頂點に達した時であつた。それから神にその一身を捧げて行動し、純然たるパラノイアの心理状態になつた。生來の温良なる彼女も、神の心を行はんとするに際しては、斷乎として一切の障礙を排し、周囲の事情を顧慮することがない。「如何に神様の御思召だからとて、さう／＼はお受けは出來かねます」と家人が拒むと、直ぐ本人は手が痛む足が惱む、又は熱が出るといふ風に必ず病症に襲はれる。仕

方なしに仰せをお請けすると直ちに癒つてしまひ、「親様の御腹立であつた」と笑つてゐるやうな工合で、感情的なヒステリーに現はれる症候と全然同一である。

斯る宗教妄想患者であつた美伎子は、次第に年を経過するに従つて痴呆状態に陥つて來た。之は先年の大本教祖に於ても同様であつて、「教祖さんもぼけてしまつて何にも分りません」とは親近者も口にしてゐたのであるが、美伎子も次第に此の痴呆状態に進んで來た。所謂教へなるものも、漸次意味の分らぬ言語の羅列となつて來た。例へば、彼女の最後の論と傳へるものは次の如くである。「如何なる處にても尋ね、分りなくば知らそ、しつかりと聞き分け、これ能う聞き分け、も早や二度と尋ねること爲らぬせ、前以て傳へてあるせ、難しいことを云ひ掛ける、一致心になつて思案せ、一時のところどういふ事情か聞き分け、今一時の事に進んで難しいこと何もない、難しいといふは、眞の治定ぢや、眞の信仰ぢや、四十九年以前説くべきことは説いた、聞かすべき事は聞かせた、何も分らんことはあるまい、世界々々、さア應へる處、それ

應へる處の事情、四十九年以前より誠といふ思案があるせ、實といふ處があるせ、押しての事情、分りか、有るのか、無いのか、分らんではあるまい、元元よりの道すがらさア今一時、應へる處どうでも斯うでも押切る事情可けぬ、ただ一時、爲らぬく、一寸今といふ、前々の道を運ぶも一時、さア一度の話を聞いて、きつと定め行かねばならん、分岐の道がある、一つ道、いかなる處も聞き分けて、只止まるのは可けぬ、順序の道々、安心が爲きぬとあるなら、まづ今の處、それく今の處、談示に談示といふ處、さア今といふたら、今はぬきさしならぬで承知か、さア事情が無くては一時定めが爲き難ない、さア一時、今それく、これ三名の處できつと定め置かねばならん、何時願ふ處、その處へまかせ置く、必ず忘れぬやうにせよ、さア一時、今から今といふ心、三名の心、しつかりと心合せ返答せよ……さア月日ありて此世界、世界ありてそれくあり、それくありて身の内あり、身の内ありて律がある、律がありても心定めが第一、さア實があれば實があるで、さア實といふ實は知るまいな、實とい

ふは火水風、さア實を買ふのやせ、價を實を買ふのやせ。」かういふやうな調子で、惚れた慾目の信徒には警世の一大神言とも見られようが、その實この文句が悉く分るものはない。言句が飛びとびで連絡がなく、即ち言語錯亂を呈してゐるのは、美伎子が痴呆状態に入つたことを示すものであり、従つて此邊からも彼女の宗教妄想の進んで來た有様を推察するに難くないのである。

之を金光教祖について見るも同様である。彼も幼時から信心深い子供であつた。成長して一家を持つた後、深く金神の祟り障りを信じ、母家を改築するにも「三月十四日辰巳の方角に小屋を掛けて轉住し、八月三日舊宅を取毀ち、四日地形、六日上棟して、廿八日家移りすべし」といふやうに、一々方位日柄を見て貫はねばならなかつた。さうして四十六才に金乃神の一の弟子に申し受けられ、「此方の様に實意叮嚀に神信心致してゐる氏子が、世間に何んぼうも難儀してゐる。取次助けてやつて呉れ。神の道も立ち氏子も立ち行く。氏子あつての神、神あつての氏子、繁昌し、また現にかかり

子に掛り、あいよ、かけよで立ち行く」といふ立教の神宣を得るまで、よく云へば信心の篤い敬神家であるが、余の立場からすれば妄想と迷信の過程であつた。四十二歳の厄年に喉氣に罹り、その時石槌の神憑を得て金神の靈驗によつて恢復したと信じた如き、今日の醫學から見れば扁桃腺炎が自然に潰れるのは當然の事であるが、迷信者は何でも神に持つて行かなければ氣が濟まない。後には彼も「日柄方位は見るに及ばぬ。普請作事は使ひ勝手のよいのが吉い家相ぢや。吉い日柄といふは、空に雲のないほんぞら温い、自分に都合のよい日が吉い日柄ぢや。如何に曆を見て天赦日ぢやと云ふても、雨風が強うて今日は不祥のお天氣ぢや、と云ふではないか。日のお照らしなされる日に吉い凶いはないと思へ」とか「人間は勝手なものである。如何なる智者も徳者も、生れる時には日柄も何も云はずに出て來て居りながら、途中ばかり日柄が吉いの凶いのと云うて、死ぬる時には日柄も何も云はずに駈けつて去ぬる」など云つて迷信打破を一の信條としてゐるが、然し元來がその迷信から出てゐるのであるから、何

と云つても五十歩百歩である。

五、邪教の中心人物

迷信と邪教とは、其の本質に於て異るところはない。たゞその形の上から區別して、假りに分けたまでである。即ち迷信の擴大された形が邪教であつて、邪教には必ずその能作者となる中心が必要であるといふのが、余の有する定義である。

邪教の中心が何であるかといへば、その邪宗を利用したまた宣傳するところの人物である。その利用宣傳は、有意識的に行はれることもあり、また無意識的に行はれる場合もある。前者の場合に、その人物は所謂山師であり、また進んでは詐欺師でもある。後者の場合は、その人物自身が先づ迷信者であり、その個人に於ては信念に忠實なる篤信者であつても、社會的に見ては厄介極まる狂人であり、法律で律することの出來ぬ犯罪者である。此の兩者は、その動機や筋道に於ては前然歩みが異つてゐるが、その説くところの究極の結果に於ては全然一致してゐる。何れも社會の邪魔物であり、

進歩を阻害する障壁であることに變りはないからである。

このよい例證として、近頃の大問題になつた大本教を擧げる。あれは實に、邪教が形成される筋道や、その能作や、それに引きつけられて行く民心の歸嚮などを、ありのまゝに縮寫して見せてくれた好模範である。余は此の事については度々筆にまた口に論述したから、今更詳しくいふことは避けるが、出口直子といふ宗教性痴呆患者を中心として、王仁三郎なる山師が現はれ、それに惹きつけられて淺野文學士が妄想者となり、捏造した御筆先や愚にもつかぬ豫言で民衆を脅かし、その虚に乗じて信を賣つたことは、實にヘボ小説家の筆には及ばぬ小説以上の事實であり、文明の世にまたと見るべからざる奇蹟であつた。若し今日に於て、心理學や宗教學が普及してゐないで、彼等邪教徒の根柢の薄弱な點を突くことが出來なかつたなら、脅かしに乗せられた群衆はわけもなく籠絡されて、遂には抜くべからざる勢力を扶植することになつたかも知れない。實に危機一髪の時であつたといつてもよいのである。

邪教の中心人物は、或る意味から云へばすぐれた心理學者である。彼等はよく民衆の心的傾向を知り、またよくそれを指導する術に長けてゐる。出口王仁三郎が淺野文學士を入信せしめるときに用ひた手段などは老獪を極めたものであつた。或る時は、鎮魂歸神の状態に於て、種々奇縁に満ちた因果を説き、「あなたの體には神様の手綱が掛つて居ります」といひ、或は妻子にまでその因縁を絡ませるなど、實に用意周到、巧みの限りを盡してゐた。

然し、いかに巧みを盡してゐても、元來が非理を眞理らしく見せるのであるから、その効果が永續する筈はない。間もなく化の皮が剥がれるに極まつてゐる。たゞ同じ化の皮を剥がれるにしても、その一刻の延引は大なる害毒を流すのであるから、その點を吾人は深く警戒しなければならぬのである。

第四章 迷信と宗教との關係

一、科學と宗教

迷信がいろいろの内容を持つてゐることは、今まで述べて來た通りであるが、之らの矛盾や錯誤の上に立つてゐる迷信が、宗教と相並んで今日廣く行はれてゐることは果して何を意味するものであらうか。宗教が絶對的の慰安として民衆に臨むべきであるのに、その領分を迷信に犯されてゐることは、正に宗教の鼎の輕重を問はれる問題でなければならぬ。

太古の人類は、自然界に對する知識がないために、或は雷電、或は暴風と倏忽に變化する自然現象に對して大なる恐怖の情を持ち、その恐怖を和げるために、之等の自然現象を神格化し、またその活動を神話化して考へた。然し今日に於ては、科學の進歩が之らの現象の説明と利用とを與へたので、斯る原始的な信仰を持つ必要がなくな

つたことは、前にも度々云つた通りである。然らば宗教は茲に於て霧消してしまつたか、といふにさうではない。科學が進歩すると共に、宗教は更に新しい使命を帯ぶるに至つたと云はねばならぬ。

科學の發展は、あらゆる方面に食ひ込んで、いろ／＼の新發見を遂げたが、然しそれらの業績が必ずしも人類に絶對の効果を齎らすものでなかつた。却つて科學が進歩した爲に、人類は曾てより以上の苦惱を受けなければならぬことが多くなつた。そのよい例は戦争である。新武器が出来たために、一爆彈の破裂によつて數十人數百人が生命を落し、毒瓦斯、飛行機と聞いたばかりでも恐ろしいものが縦横に活躍する。かく科學のために戦争は一層慘憺たる光景を呈するために、かの歐州大戰に於ては、腰曲り病といふ奇病が発生した。之は戦争の慘苦に對する恐怖の情から兵士が罹るもので、即ち何ら肉體的原因なくたゞ精神感動によるものであるが、之によつてもいかに彼等が苦惱を受けたかを知るべきである。之らの例は、街頭にも見ることが出来る。

自動車を驅るために一部の人は快樂を得ても、あの不快な音や疾驅によつて脅かされる多くの人は、どの位不愉快な影響を受けるか知れない。また社會組織の上に及ぼす方面から見ても、機械が発達したために手工生産が機械生産に移り、數多の失職者を生ずる。此の失職者の精神状態が悪化することにより、いかに社會の安定が亂されつつあるかといふことは、近時頻々と起る諸種の問題に見る事が出来る。

かういふ風に、單に科學だけの進歩は、却つて人類に苦痛を與へる。そこで、科學の進歩と共に、宗教的文化の發展もまた、必須の事項となるのである。

今日でも一部の人は考へてゐるが、充分に科學を活用すれば、宗教などの必要はないといふ説がある。然し之は一を知つて十を知らぬものである。かういふ人は、科學はすべてを説明解釋し、すべてに亘つて働くことが出来るから、その他のものゝ必要を認めないといふのであらうが、事實はそれを裏切るばかりである。科學は進歩した、然し宇宙問題の解決はつかぬではないか。科學は進歩した、然し人間の生命の根元に

關する説明は出来ないではないか。科學に盲信する人は、なまじつかに科學を振り廻すからいけないのである。エマーソンは「科學を少し知つたものは無宗教になるが、科學を本當に知つたものは、本當の信仰に入る」と云つた。科學は科學だけでは立てない。それを整理し、正しく進めて行く精神的文化が必要である。

二、宗教の還元と墮落

科學を支配すべき宗教が、今日までの経過に見ると、却つて科學を蔑視し、排斥しようとするが多かつた。そこに迷信の萌芽は胚胎したのである。

科學と宗教は密接な關係を持つてゐるが、その時間的關係に於ては、科學は宗教の後に出來たものであり、むかしの宗教と今の宗教とは、この後から生れて來た科學に對する關係によつて、その性質を異にするものである。むかしの宗教は、科學がない時代のものであるから、科學的考察からは相容れない分子があつた。従つて、後に生じて來た科學に對して、自分の領分を犯されると考へて、反抗し排斥した。こゝに科

學と宗教との争ひが現はれ、各國各民族に於ける中世紀の腥い歴史を彩つたのである。ローマ法王の權力のために、ブルーノー、コペルニカス、其他幾多の科學者が、或は迫害され、殺戮されたのは有名な例だ。

けれども、それも時代の進歩と共に、漸く科學に對する關係を自覺することによつて、宗教が自己を改造し進歩して來た。そして今もなほ進歩して行きつゝあると見ねばならない。

然るにこの本當の傾向は、まだごく新しい、未熟な程度にあるものである。歐洲戰亂さへもまだこの傾向に惠まれてゐないから、それが本當に一般に發現するのはまだ遠い先の事だ。社會的に云へば、一部の哲人や科學者の間には自覺されてゐても、大多數の民衆にはまだくゞ露ほども認められてゐない。ここに迷信の芽を育む培養基がある。

即ち古い型の信仰に囚はれた多くの人々は、昔のまゝの科學排斥に閉ぢこもつて、

新しい方法にはすつかり眼を閉ぢようとする。醫學があるにも拘らず、疱瘡がはやれば「鎮西八郎爲朝御宿」と書いて門口に貼つて置けば罹らぬと思つたり、平常は寄りつきもしないお宮に大病平癒の祈願をこめたりするのは、即ちこの還元性の發露と見るべきである。

還元の努力は、また停滯を意味する。動いて止まぬ人間生活の支配の任務を果たすのに、宗教のみがひとり停滯することを許されないのは勿論である。一日停滯すれば一日だけ人間の進歩をおくらせるのである。一日おくれることは一日だけ人類の苦惱を増すのである。即ち人間の慰安の糧となるべき宗教は、その還元性によつて、却つて人間の苦痛の種となるのである。

宗教の還元は、取りも直さず宗教の墮落である。それが即ち、迷信であることはいふまでもない。この迷信と宗教との間に、紙一枚の隙を隔つるに過ぎないことは、吾人の警戒を要する點である。有名な大寺院の正面に不潔極まるおびんづる様のあるのなどを見るごとに、余は常に深く之を思ふ。

三、宗教の昇天と迷信

人間はその個性によつて、知識や才能に差違がある。すべての人の頭が、同じ程度に働くものではない。従つてその信仰も、その知識や才能の程度に應じて、異るところがなくてはならない。その根本に於ては同じでも、その實行に於て異なるものである。客觀的の神を認めて、それに一切を任せようとするのが知識の低いものゝ信仰であれば、その客觀的の神を主觀的な自我の中に發見して、そこに信念を形作らうとするのは知識程度の高いものゝ信仰である。何れでも、その根本的意義は同じで、たゞその現はれ方が異なるだけである。

釋迦は苦、集、滅、道の四諦によつて苦惱解脱の理想を説き、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八正道によつてその理想實現の道を示した。これは釋迦教といつて、自我の修練によつて苦惱から解脱することを教へたものである。

然るにまた釋迦は、彌陀教なる他力門の信仰をも説いてゐる。阿彌陀佛を一心に憶念することによつて、佛の國に往生するといふ理想である。精進の努力も何もいらぬたゞ一心に佛を念すればよいといふのである。前の釋迦教に比較すれば、全然相反のやうであるが、然し苦惱解脱といふ理想からいへば同じことである。この二つの相反した道を説いたのは、人間の個性を認識したからで、即ち佛教の言葉によれば、聽衆の根機に従つていろ／＼の道を説かれたのである。こゝに釋迦の偉大なる一面がありその人間を見る眼が鋭かつたことを敬服せざるにゐられない。

佛教でも基督教でも、みな人によつて法を説き、人心を深く捉まへる根柢を持つてゐたから、今日の如く廣く普及したのであるが、それも時移り人變つて、その根本精神に無理解な傳道が行はれ、民衆に受け入れられずに反撥されて来る。これを余は宗教の昇天と稱するのである。即ち宗教の昇天とは、民衆に對する無理解や、權力の惑溺や、自己欺瞞やによる末世の現象である。

歐洲の中世紀に宗教が極めて傲慢に陥り、民衆を虐げ、而かも内面に於て腐敗墮落の限りを盡してゐたことは周知の事實であるが、日本の中世紀も同様であつた。一天萬乗の君をして、「まゝにならぬは賀茂川の水と叡山の法師」と嘆かした法師はらの狂暴は、まことに以て沙汰の限りであつたのである。權力の惑溺は悪い意味での昇天であるが、またよい意味で、民衆の理解を超越してしまふ昇天もある。何れにしてもその結果は同じである。

迷信のつけ目はそこにある。宗教が昇天して理解を超越してしまつた時、民衆は杖を奪はれた盲人も同様である。何にたより、何に縋るべきであらう。何でも手に觸れるものに掴まらねばならぬ。例へ一本の藁であらうがたよらねばならぬ。地獄への道であらうが、導かれるまゝに歩まねばならぬ。斯くて卑近な、當座的な、不合理な、蜜のやうな甘い毒を持つた迷信が、深く人心に食ひ込むことになる。それは迷信の持つ有力な武器である。

四、邪教の宗教的内容

迷信を一層擴大していくらか組織立て、その運用の中心人物となるものが現れるとそれは所謂邪教となるのであるが、これらの邪教には秩序整然とした教義を持つてゐるために、容易にその迷妄を指摘し得ないやうなものもある。然し仔細にその内容を検索し、心理學的の眼光を以てその成立と實際とを吟味すれば、直ちに化の皮は剥がるべきものである。例を天理教にとつて見よう。

今日の天理教の教旨なるものを見ると、國常立尊以下の十神を天理大神と稱へて奉祀し、此の天理大神に對する靈肉救済の願望と、神の御國なる甘露臺を地上に齋らさんとする事を説いてある。然しこの教旨は固より疑問であつて、中山美伎子が神憑になつた時、果してこの十神の天啓を受けたかどうかは眉唾ものであり、また果して斯る教旨に終始一貫して居つたかどうかは尙更疑はしい。直言すれば、之らの教旨祭神は、明治四十一年の公認運動に際して、勝手に作り上げられたものが多く、その公認

運動に於ても、幾多の醜事實があるのは、神を口にする同教徒幹部の行爲として甚だ不謹慎極まるものである。

余が天理教を正當の信仰と認めない理由は、前の心理的檢索と相俟つて、次の數條に約言することが出来る。第一に、宗教妄想者の所謂神憑なるものを信じないからである。吾人が眼を大にして觀察するならば、斯る現象は古くから至る所に見られる人格變換の一種で、美伎子の場合もさうした一の精神的現象に過ぎないからである。たゞさうした精神的現象の理論を知らぬものによつてのみ盲信されるのであるが、斯ることを知らずして達する信仰境と、斯ることを知つてその上に達する眞信仰とは、大なる相違があることを思はねばならぬ。第二に、同教の説く教旨が、全く後日の公認運動に於ける添加物であつて、任意に作り出されたものである。それも、單なる神道からの借り物や盗み物が多いのであるから、たちが悪い。神様がさうして勝手に増減されることは、その教へが純粹でないことを示す。之には勿論在來の神道にも責任が

ある。明治維新當時の外教侵入に際し、之に對抗するための神道の祭神を如何にすべきかについて、各神學者間の意見が一致しなかつたなどはそれを示すもので、神道一般の弱味ではないかと考へられる。第三に、同教に走せ參ずる信徒なるものが、純粹の求道者でないといふことである。信仰は元來感情的のものであるが、而かも尙理性の統御を要する。所謂盲信に墮ちてはならぬものである。然るに同教信徒は、多くは靈の救濟よりは肉の救濟を求めて行き、而して群衆心理的に附和雷同したものがその大部分である。従つて靈の救濟どころか、却つて靈の安定を攪亂されることも出來てくる。之で正しい信仰といふことは出來ない。病氣になれば御供米ばかりを與へて干し殺してしまひ、御祈禱料を何百圓出せと云はれても唯々として黙従し、家庭の平和のみか生命をまでも危殆に瀕せしめるやうな恐ろしい非常識に陥る。正しからぬ信仰、邪教の恐ろしさは、人をして無意識の中に破滅せしめる所にあるのだ。

それであるから、吾人が宗教の正邪を判斷するに際しては、單にその表看板たる教

義などと稱するものゝみに拘泥してはならない。金光教では、その祭神を日の大御神、月の大神、金の大神の三とし、之を總稱して天地金乃神といふものであるとなし、この金乃神は俗信の金神とは違ひ宇宙の本體たる金之神であると力説してゐるが、既に教祖の信仰が所謂金神より出てゐる以上、あとからつけたと云はれても仕方のないものである。これは最近の大本教に於て、教祖が「うしとらの金神」を説いてゐるのに、組織病に罹つた幹部連が方角違ひの天御中主之神なる造化神を擔ぎ出して來たのと同じ行き方である。かういふ風であるから、金光教が「懷妊の時腹帶するより心に眞の帶をせよ」とか「縁談に相性を見合すより信の心を見合せよ」と云つてゐても、その實際に行はれてゐる信仰状態は頗る非常識なことが多い。一例を挙げればかういふことがある。東京に住んでゐた或る夫婦の信者は四十近くなつて懷妊したが、「神様の先生の云ふには金光教を信すれば妊娠をしても腹帶も要らないし、勿論醫者も要らない。悪疽もなく腹も痛まず、隣知らずに産が出来るし、頭痛や血の道も出ず、生れた子供

は虫氣も起きぬし、産婦は子供を産むと直ぐ立働きも出来るから」と云ふので醫者にも見せず「金光大神お助け下さい」とばかり祈つてゐた。そのため、年寄つてからの妊娠であるから非常に難産で、遂に母子ともに死んでしまつたと云ふ。悲惨な迷信の害毒である。

かうした教義と信仰の實際との不一致は、つまりはその教義が借用物か贗造物であるために起るのである。邪教徒にあつては神は賣りものなのだ。所謂教祖連は宗教妄想患者であるから強ちに神を賣りものにしたとも思はれないが、その後繼者にさうした野心を抱いたものがあつたので、斯る教義を擔いだのである。更に別のものになると、例の島村みつ子の唱へ出した蓮門教が、徹頭徹尾水を靈物であるとして信仰治療を行つたり、稻荷教といふものが「精は稻荷といふことにして、精神の神の字は稻荷大神と云ふ事也、然らば何が故に精を稻生と云はんか、これ稻荷大神は五穀を生み給ひける神なるを以て、米遍に青と書いて精の字生ず、青々しくあるが故に精神あるも

のにして、黄に或は赤になれる稻葉に精神あることなし、其故を以て精の出來す何ぞ玄妙ならずや、精神とは即ち稻荷大神なり、而して大元稻荷大神は大元の精神と云ふ事也、大元の精神とは宇宙の太靈といはずして何ぞや」と珍妙な教旨を振廻したり、數年前檢舉されて瓦解した巢鴨天然社の岸本可賀美が、主神の猿田彦の外に、拂井戸之神と云つて諸種の因縁を拂ふ神や、金山彦之神と云つて毎夜彼の夢枕に立つては鑛山や金塊の所在を教へる珍妙な神を祀つたりしたのは、神を食物にした借用物贗造物のよい例である。かうした例は、また佛教方面にもあつて、日蓮宗の行者や、眞言秘密の行者がその宗旨を食物にしてゐることは、時折耳にする所である。

要するに邪教の宗教的内容は、如何にその表面を飾つても、その根柢は薄弱なものであるから、その點を明かにして、徒らに幻惑されないやうにとめなければならぬ。冷靜な態度でその成立を吟味しなければならぬ。

第五章 迷信と道德との關係

一、迷信の功罪

迷信の道德的價值如何といふことは、換言すれば迷信の効利的價值如何といふことである。道德はいゝ意味の功利主義をいふもので、迷信もその意味に合致しなければ道德的價值ありとは云はれない。迷信の功罪といへば、大抵想像はつくのであるが、その功果及び罪過がどの程度まで社會に影響し、どの程度まで交渉し消長し合つてゐるものかといふことは、まだ本當に考へられてゐない。いゝ意味の功利主義とは、人類の社會生存のために寄與することをいふので、消極的に云へば人間及び社會の保護となり、積極的に云へば人間及び社會の創造とならねばならぬ。迷信が果して斯る意味を成し遂げてゐるのであらうか。或はまたその反對の害惡を流してゐるだらうか。嘗ては功果あつたが今は罪過のみとなり、またその逆を行つてゐるやうなこともあり

はしなからうか。そこを余は少し考へて見たいのである。

人類學者フレーザー氏は、嘗て未開野蠻人の間に於ける信仰狀態を研究し、幾多の材料を蒐集して綜合した結果、迷信には暗黒面あると共に光明面もあることを發見し次の四つの命題を提出した。

- 一、或る人種、或る時代に於ては、迷信は政府殊に王制政府に對する尊敬の念を強大にした。それによつて、内治の確立と維持とに貢献した。
- 二、或る人種、或る時代に於ては、迷信は私有財産に對する尊敬の念を強大にした。さうして、その享樂を確保することに貢献した。
- 三、或る人種、或る時代に於ては、迷信は結婚に對する尊敬の念を強大にした。さうして既婚者及び未婚者ともに、その間に於ける性的道德の法則に對する、一層嚴重な遵奉に貢献した。
- 四、或る人種、或る時代に於ては、迷信は人間の生命に對する尊敬の念を強大にし

た。さうして、その享樂の安全に貢献した。

(J. G. Frazer : *Psyche's Task*, 1920, p. 4)

これは即ち迷信の光明面を擴大して見たもので、中々面白い觀察である。然し氏の此書は、主として政治に對する迷信の効果を論ずるのが主になつてゐるので、個人的問題は幾分少い嫌ひもないではないが、然し迷信の効果を研究するのに野蠻人の信仰を對象として、そこから吾人自身の立場を暗示しようとしたことは、氏のやうな人類學者でなければ出來ぬ企てである。以下少しく氏の記述と材料とに従つて、この問題を考へて見よう。

二、迷信と社會道德

野蠻未開人の社會にあつては、その社會を運用する根本動力となるものは信仰のみであつた。彼等は、自分の行爲に對して、何故さうしなければならぬかといふ理窟を考へることなく、たださうしなければならぬと信じてゐるだけであつた。一切が信念

によつて動かされてゐたので、その信念が幸にして正しい立脚地にあるものなら、社會道德を維持するために役立つことになるのであるが、それが正しからぬものであつた時には、社會にも個人にも大なる弊害を及ぼすことになる。これは彼等の信念が、理性の統一を経ないで、盲目的な迷信だからなのである。

彼等は先づその社會の首長となれるものに對して、絶對的の恐怖や信頼を持つてゐる。それは、殆ど本能的な心持であつて、何故といふ説明を許さぬものである。メラネシアの土人が信ずるところによれば、彼等の酋長は幾多の精靈即ち彼等の言葉でいふマナと交通する力を持つてゐる。そしてその精靈の作用を人間の生命に及ぼす事が出来る。だから酋長から賦課を命ぜられたならば、それは直ちに拂はなくてはならない。若しそれに反抗したならば、酋長は災難や病害を下して苦しめることが出来るのである。フィジ島の土人でも同様で、かうした酋長の偉大なる權力は、その死後に於ては祖先崇拜宗として繼續する。即ち、死んだ酋長はなほ人々に對して執着を持つて

居り、彼等が墓に捧物をしてその靈を慰めることをしないならば、飢饉や暴風や洪水などを齎らして罰するだらうと信せられてゐる。さうして、その子孫で現に生きてゐる會長も、また神聖なる人である。その人の體を忌みものとして恐れ、若しそれに觸れたなら、必ずや見えざる靈の怒りを招かずにはゐられない。ポリネシアの土人でも同じく、會長の権力はその超自然的な能力、即ち祖靈と交通したりする魔術的な呪力によるのである。かういふことが一般人の間に考へられてゐるために、會長と一般人との間には、眼には見え難いが犯しがたき隔りが設けられ、それを侵すものは死ぬとされてゐるのである。

ニウジールランドに卅年以上もゐた宣教師のテイラー氏は、マオリ族の會長に就て書いてゐる。即ちこの會長は、一種不自然な發音の言葉をば、會長の言葉として使つてゐる。彼はその部下と自分とを嚴重に區別し、離れて食事する。即ち彼は神と交通が出来る絶對の權威者なのである。

會長に對する絶對的の服従は、彼等未開人の社會を形成する根本觀念である。之は、社會構成の根本概念を、知識的に確認することの出来なかつた彼等にとつては、まことに止むを得ない唯一の道であつたらう。ここに迷信が社會道徳に貢献した功績がある。然しそれは同時に、他の方面に於て社會道徳を破壊し、その貢献に裏切る危険性を持つた貢獻であつた。

前のマオリの一會長の實例は、即ちその一側面を語つてゐる。彼は神聖な體を持ち、神と語る事が出来るといふ選ばれたものであるが、如何にかして神にまで成らうと欲した。それには大きな肉體が必要であると考へられた。さうして彼の子供は幾人も乳母によつて養はれた。乳母たちは自分の子のもを奪つてまで會長の子を養つた。それで、乳母の子等は飢えて瘦せたが、會長の子は反對に肥つてまる／＼としてゐた。斯る不合理が許されるので、こんな事は肉體のみに限らない。

會長はアチユアといふ神だと見られるのであるが、それには有力なものもあれば無

力なものもある。で無力の者はどうにかして有力にならうと欲し、手段をめぐらして有力者の霊と合體しようとするのである。だから彼等が一人の會長を殺すと、直ぐにその眼を抉り出して嚙み込んでしまふ。さうすればアチュア・トンガ即ち神力が彼の肉體の内に宿ると信せられる。之は肉體を殺すのみでなく、その敵の霊をも奪つてしまふことなのである。斯くて彼は次から次へと會長を殺し、その神力は益々大きくなつて行くと考へる。神靈を一種の咒力と考へ、それに對する信仰と、またそれに對する野性的な欲望とが結びついた結果は、却つて社會の平和を破壊することになる譯である。野心家の跳梁のままに、統治權を左右され、見えざる精靈のために支配される彼等未開人の信仰生活は、まことに憐むべきものと云はねばならぬ。

「自分が人間で、土から生れたものだと思つてはならぬ。自分は天から來た。自分の祖先は皆其處に居り、神である。自分も其處へ歸るのである」とマオリの會長は宣教師に豪語した。而かもこの偉大なるべき彼は宣教師に救助されてゐる。彼が或時咽喉

に魚の骨を立てて死にさうに苦しんでゐた時、周圍に立つてゐた人々は誰も進んで取つてやらうとはしなかつた。何故なら彼の體は神聖であるから、それに觸れれば死ななくてはならぬからである。たまたま通りかかつた宣教師が、骨を抜き去つて助けてやつた。半時間も苦しんで言葉が出なかつた會長は、言葉が出るやうになると、宣教師が骨を抜くに使つた道具をよこせと云つた。それは、彼の神聖な血を流し、且つ神聖な頭に觸れて汚したから、その損害の代償をせよといふのであつた。

此の滑稽な逸話によつても知られる通り、盲目的な信仰は總ての場合に吾人の理性をくらし、理窟のないところに柄をすぎさせようとするものである。それは惡意あつてするものではない。然し惡意がないだけに一層熱烈であり、顧慮するところがない。それだけ救済しにくく、根強い力を持つてゐるのである。迷信が社會道徳を維持する力があつても、此の破壊の方を考へれば、結局の差引は害毒の方が多いであらう。アフリカ方面でも同様な實例が多々ある。西アフリカのロアンゴなどは、全くの專

制政府で、人民の生命や所有物はみな王に屬すると考へてゐる。王は即ちいつでも己れの欲するままに、それらを奪ひ處分することが出来る。それには何の相談も要らなければ、何の不平を云はれることもない。彼の面前では人々は敬禮を捧げねばならぬ。彼は地上の人ではなく、天から雨を降らすことの出来るものと信せられてゐる。だから雨が降らないでひでりが續くと、收穫が得られないといふ恐れから、彼等は酋長の許へ雨を降らせてくれと贈物を携へて嘆願しに行く。すると王は人々を満足させるため、自分で天に祈ることはせず、自分の臣下の一人に直ちに入用だけの雨を降らしめよと命じて、之を委せる。臣下は雨の降りさうな雲が現はれると、人々の中に姿を現はし、王の命令を行ふかの如く見せる。女も子供も彼の周りに集つて、「雨を、雨を！」と出来る限りの聲で叫び立てるのである。

之等の不徳な王の信仰にしても、その初期に於ては最も熱烈に保たれてゐたらしい。即ち、何か災難があるとか、不能力になるとか、傳染病に罹るとか、前齒が缺けて姿

が醜くなるとかした場合には、彼は毒を仰いで自殺する習慣であつた。之らの缺陷をなくすために、王はどんな疵もあつてはならぬといつて死んだ。然るに後になると、死ぬどころではない、却つて臣下を責めて、自分の缺點の模倣までさせようとする。而かもそれが嚴然と行はれねばならなかつた。

日本でもかうした狂信のあまり、神に全財産を擲つたり、教祖の不潔物を崇拜したりした例が少からずある。信すべからざるものを信することは、何處の國でも價値のないことは同様である。

三、迷信と個人道徳

社會道徳と個人道徳とは、別段嚴格な區別は立てられぬものであるが、余はただ便宜上道徳の影響を及ぼす範圍の廣狹に従つて言葉を用ひただけである。それで、前には社會的に及ぼす迷信の功過を考へたが、今度は個人的に及ぼす場合を觀察して見よう。

信仰が道徳を維持するものであることは、普通の場合には認めねばならぬことである。それは、普通の道徳意識よりは一層強い、一層根柢の深いものであることが多い。神に對するすべての信頼、神に對するすべての恐れのために、その行動はすべてが純潔に保たれる。人が見てゐないからとて、塵一本も盗むことはしない。いついかなる所でも、神は見てゐると信ずるからである。理窟でないから、理窟以上の力を持つことが出来る。余の一友人は、路傍の乞食に錢を與へずして通つたことをいたく後悔し、わざ／＼十町も後戻りして、僅かに持つてゐた錢のすべてを與へた。自分の貧しさに假托して、他を憐む心を押し隠したことが、如何にも神に對して濟まなかつたからであると、彼は切なさうに余に語つた。

神に對して濟まない、それは實に他人の窺知するを許さざる境地である。然しその濟まないといふ判断は何處から來るのであるか。理窟以上の境地であるが、而かもそれには何らかの統整するものがなくてはならぬ。それでなかつたら、その「濟まぬ」

心持は、單なる神に對する恐れとなり、徒らなる自己卑下となり、人生に對して何の寄與するところなく、却つて人の行爲を束縛する桎梏となるのみであらう。そこに熱烈なる信仰の迷信に轉化する危険性が含まれてゐる。

真宗の開祖は、在來の宗教が自力門に信頼して、兎角入り難く民衆の力となり得ぬことを觀得し、在家のままの信仰、あながらの救濟、即ち彌陀の攝取不捨の大本願を説かれた。之によつて民衆は救はれた。すべての不安は除かれ、すべての罪や汚れは清められた。實に彼等は欣喜雀躍せずにはゐられなかつたのである。然るに、本願寺が増大すると共に、信仰の状態はどうなつて行つたであらうか。織田信長に向つて楯ついた信徒なるものは、信仰の徒なるに似てその實信仰の徒ではなかつた。彼等は信仰のために戦つたものではなくて、自己の誇大されたる自尊心のために戦つたのである。己を空しうして彌陀の救濟を受くべく教へられた筈の信徒たちは、己れを空しうするどころか、我意我心の滿々たる徒黨に化してしまつた。少くとも、さうした野

心家に操縦されて、自覺をすることが出来ないほどの病態に墮落してしまつた。此の轉化が行はれるところに、迷信のおそろしさがある。今日の門跡崇拜者達にも、果して此のやうな傾向がありはしないかを余は疑ふものである。

これをまたフレーザー氏の記述によつて、未開人の間の事實に考へて見よう。未開野蠻人の間に於ける性的道德は、非常に厳しく考へられてゐる。人間の性的生活が、亂婚雜婚を経て今日に至つたことを一般的の事實として認めてゐる吾人から見ると、彼等未開人の間には定めし亂雜な性的關係があつて、紊れた状態にありさうに思はれる。然し事實はさうでなく、性的道德は、或る意味に於て、寧ろ文明人以上の嚴格さを以て保たれてゐる。

ボルネオに於ては、大抵の犯罪は罰金で處分されることになつてゐるが、たゞ一つ血族姦通だけは非常に重く罰せられる。此の犯罪は、一家に對して死を與へる。殊に穀物の收穫がなくなるために、飢餓に瀕せしめられるものと考へられるので、二つの

刑罰が行はれる。犯罪者の罪が明白になると、彼等は家から離れた野外の河の堤の上へ連れて行かれる。そこで彼等は地に投げ倒され、鋭い竹の杭で肉體を貫通され、地へ釘づけにされてしまふ。竹は根が生へ、枝葉が繁り、通る人への警めのやうに残つてゐる。斯くて云ふまでもないことであるが、其の場所はすべての人に恐れられ忌まれる。また他の刑罰法は、犯罪者を丈夫な編物製の籠に入れて、河へ投げ込むのである。さうして此の後者の方が、血を流す憂ひもなく、實行者を得るに容易であるといふ關係から、多く採用されると云ふ。何れにしても慘酷極まることで、彼等の如く絶對の神を信じ、その御名によるものでなければ、到底實行は出来ない。斯る殘酷を敢てせしめるまでに、彼等の實際生活に於ける迷信は、根強い力を持つてゐるのである。然し迷信はどこまでも迷信であるから、そこには常に矛盾を伴つてゐる。迷信が性的犯罪者に苛酷に臨むと共に、また極めて無道な性的道德の破壊をも許してゐる。それらのすべては神の御名によつて行はれるのであるから、吾人の理解を以ては腑に落

ちぬことばかりであるのは、敢て怪しむに足りまい。即ち彼等は、血族姦通が時には幸運を齎らすものと考へるのである。

南東アフリカのトンガ族では、河馬狩りをする場合に種々な迷信が行はれる。彼等は先づ河馬の動靜を察して、いよく一ヶ月間の遠征を企てんとする時には、自分の娘を呼んで性的關係をする。之は日常生活には非常に強く忌まれてゐる事であるが、此の場合には彼をして勇者たらしめる。彼は家に於て或る物を殺した、だから河の上でも大なる功績を立てることが出来るといふ寸法なのである。そしてその遠征の間は、彼は自己の妻と交ふことはしない。そしてその行爲があつてから、その夜直ちに息子と共に出發する。斯くて河馬を狩り暮らし、遂にもりを巨大な動物に打ち込むと、直ちに妻に告げるために走り歸る。すると妻は小屋の中に靜かに閉ぢこもり、飲みも食ひも粉を挽くこともせずになければならぬ。若し妻が之らのことをすると、傷つけられた河馬は怒つて戦ひ、夫を殺すだらうと信せられてゐる。

此の迷信に於ては、明かに性的道德の破壊が許されてゐる。之れは非常の事をする際に、何か非常のことをするのが勇氣をつける方法だと考へることから起つた迷信に外ならない。之は吾々にもある心理で、迷信行爲には多くある一種の危険行爲の伴ふのが普通である。即ち、夜半丑滿の時に呪ひをして、人に見つけられぬやうにせなければならぬとか、寒中に水垢離を取れば願が叶ふとか、大なり小なり何か難とする所を含ませる。これが或る場合には秩序を紊る道德違反的行爲となるので、死人の腦味噌を取るために死屍發掘の罪を犯した者があつた。また曾ては、厄年に生れた子であるからとて、それを捨兒し、遂に犯罪者として擧げられた事實もあつた。何れも迷信のために理智の働きを失つた行爲で、誤つた信念からさうしなければならなくなり、感情のために意志の自由を束縛されてしまつたのである。

迷信によつて道德を維持されることはあつても、然し紊される方が更に多い。況んや道德維持は必ずしもこれによる必要がないと信する吾人に於てをやで、迷信は何處

までも吾人の敵である。

第六章 迷信退治の問題

一、信長と秀吉の逸話

迷信の退治策を如何にすべきかといふことは、何時の時代にも問題となる事項であつて、時の爲政者や心ある人の頭を悩ますのであるが、而かも未だ徹底的に効果を擧げたといふ話を聞かぬ程、永久的と云つてもいいやうな問題である。或は、迷信は人間生活に缺くべからざる普遍的の事項かも知れぬと疑はれるが、然しその害毒が客觀的に明かである以上、そのやうな断定は許されぬことで、何處までも迷信は根絶しなければならぬものである。この迷信根絶の困難さといふことは、之を歴史的に眺めて、人間文化思想の流れの上に尋ねて見ると、一層明かに、一層切實に感じられるやうに考へられる。

而して、この迷信はその本質に於て個人的な信仰の狂へる現象であるにも拘らず、それが流行性乃至傳播性を持つてゐる點に於て、また社會的信念の問題ともなる性質を有してゐる。従つて之が根絶策を考究するに當つては、單にその個人的信念を問題とするのみならず、その社會的信念にまでも及ぼし、社會問題として取扱はねばならぬ。即ち迷信退治の對策は、單に宗教家の立場よりのみならず、政治家の方面よりも社會學者の方面よりも、更に進んでは、心理學者の方面よりも深い注意を拂はねばならぬといふ、忽せに出來ぬ大きな問題となるのである。而して、余の立場は、此の最後の心理學の方面よりするもので、從來此の方面が兎角閑却されてゐただけ、それだけ重要な方面であり、政治學や社會學や宗敎學の各方面に於て、これが基礎とならねばならぬと考へる。これが等閑に附せられてゐたために、此の種の問題が曾て効果を擧げ得なかつたのだと思ふ。それも、歴史上の事實に照らして見たら、自から明瞭になることであらう。

余は近頃織田信長の逸話を讀んで、頗る興味深く感じた。それは天正年間に、漂泊僧無邊といふものがあつて、安土城下に来て丑の時の傳授といふ怪しげなことを行つた。その無邊を信長が召喚して、「客僧の生國は何處か」と尋ねると、ただ「無邊」と答へるのみである。「唐か天竺か」と重ねて問ふも、「修業者」とのみ答へて實を云はぬ。信長は聲を荒くして、「人間の生れる所は三國の外にない。客僧は怪物か、怪物ならば炙つて遣はさう。火の用意をせよ」と命じたので、流石の彼も驚いて「出羽の羽黒の者です」と辛うじて答へた。斯くて取調べの結果、一旦は放還したが、「臍くらべ」といふ怪しげな事をした事が分つて後に再び尋ね出し誅戮したといふ物語である。

また、豊臣秀吉にも似たやうな話がある。即ち「理齋隨筆」によると、南都東大寺の龍松院に、秀吉が稻荷に送つた手紙といふのがあるさうだが、それは次のやうに書いてある。

其方支配の野子秀吉召使の女房に取付多惱候如何の遺恨にて成其離候哉此儀被

聞届可被申越候其仔細なく候はゞ早々可被引取候猶於延引は日本國中の
狐狩可申付候委細之儀は吉田神主口上申含候恐々不宣

三月十七日

秀吉花押

稻荷大明神殿

之らの逸話に見る信長や秀吉は、餘程信念の強い、偉い人物だつたらうと思はれる。然しまた、その頃の時代思潮を考へて見るに、その位の人物であつたのは、固より當然の事とも思はれる。

二、権力者の壓迫

當時の武士階級はどうであつたかといへば、彼等の信仰はただ力の一點張りであつた。すべての勝利は力の勝利である。雲の如く各地に群り起つてゐる諸雄を倒して、都に一番槍を乗り入れようとするのに、彼等は女々しい運命觀などに囚はれてゐる暇がなかつたに違ひない。ただ勝利を得るがためには、骨肉も相食んで争つた。信義を

も無視して、ただ強いものが榮冠を得るのであつた。その代表者が即ち織田信長であり、また豊臣秀吉である。彼等には、神などはたよるには餘りに弱い手綱で、ただ「鳴かずんば殺してしまへ杜鵑」または「鳴かずんば鳴かして見せう杜鵑」の力が、絶對無上の信念であつたに違ひない。その力を神に寫象して見ることもしないほど、彼等はその信念によつて、所謂宗教なるものの絶對性を破壊し去つたのである。

一方、果てしなき戦亂の巷に生きてゐたその當時の民衆は、生活上にも精神上にも疲れ切つてゐたに相違ない。その以前の足利時代からの暴政に虐げられて、既に彼等は重荷に疲れてゐた時である。生活上の煩ひを癒すの道なく、頼むべき安立の境地を求めて得られず、止むなく彼等は、直ちに自分を救つて呉れさうに見える迷信の門に駆け込んでしまつたのは、當然過ぎるほど當然な筋道であつたに相違ない。さういふ苦しい生活に在つた彼等が、また直ちに戦國の騒々しい時代に置かれたのである。迷信が益々度を深くして行くのは、これまた當然過ぎるほどの理である。迷信は何時如

何なる時代に於ても、打算的現實的であるのが、共通の形態である。刹那的の快樂、眼前的の利益によつて、直ちに人を魅惑する。いつでも人の弱點につけ込まうとする。迷へる人の眼につき易く、入り易く、分り切つた當座的の眼つぶしを呉れて、人の理性を盲目にするのが常である。斯ういふ好餌のある所に、彼等迷へる民衆は、溺れるものが藁にも掴まるやうな姿でたよつて行つたのである。

此の兩者の争ひを、今日の我々の立場から眺めると、いろ／＼のことが考へられる。力の信仰も、その根本的意義の如何によつて、是認するか否認するか岐路が生ずる。根本的意義とは何であるかと云へば、人間生活完成の手段として役立つてゐるかどうかといふことである。新しい、而して最も妥當な見解に従へば、吾人の生活が完成されるといふことは、吾人が意志の自由を持つて、他を犯すことなくまた犯されることなく、欲求を満足させて行くことである。最も新しい、而して流行の言葉を假りて云へば創造である。斯る意義を體現した時に、本當の人間の生活が成立つ。そして、斯

る生活の手段として用ひられる力が、本當の意味の力である。それは他を犯す暴力であつてはならない。自己を誇示する優越慾であつてはならない。他を屈服せしむる權力の表象であつてはならない。

信長や秀吉は、勿論その時代の影響として、斯る人間生活の意義に徹した力の信仰は固より持つてゐず、權力に對する衝動のみによつて動いてゐたのであらう。茲に當然の結果として權力の崇拜者と、迷信の惑溺者と、二様の相異つた潮流が、社會の上層と下層とに相背馳してゐるといふ現象を呈した。この下層の信仰を、上層から壓迫して抑へつけたのである。權力者は多く現在の、一時的の強力を加へるのみだからただ力にまかせて抑へたといふだけで、迷信の塊りを根柢から潰滅せしめることは出来なかつたらう。力の信念と、運命の信念との争ひであつて、一時的には力の信念が勝つたのである。然し力の信念は、信長や秀吉のやうな成功者であればこそ持ち得たのであつて、それではなければ何の意義もないものである。即ち力の信念は一時的であ

るから、それが勝つたとしても、何時まで続くかは疑問である。故にこの迷信退治は心理的意義に於て成功したものといふことが出来ないものであつて、斯る事實が、歴史上の記録に照して往々見られるのは、深く注意すべきことである。

三、權勢者の惑溺

更に翻つて徳川時代に入ると、其處にはまた全然違つた空氣が見られるのである。信長と秀吉と家康と此の三傑を列べて見ると、直ぐ誰しも心附かれるやうに、家康には前代の訓練を経て來てゐるだけに、單なる力の信仰のみでなく、それを未來にまでも延長させようとする用意周到な性質が見られる。即ち彼に至つては、餘程未來に對する依頼心が現れて、それに對する警戒と準備とを怠らなかつた。皇室に對し、諸大名に對し、嚴重な規範を定めて、後顧の憂ひを斷つに汲々とし、また信長が本能寺に手を焼いた前車の轍に戒めて、諸宗法度を嚴かに規定した彼は、また東叡山寛永寺を上野に建てて、金地院崇傳と天海僧正に歸依するだけの運命觀を抱く彼であつた。武

の力を無上に信じた彼も、死後の運命を恐れることに於てはまた凡人と異なるなく、東照大権現と崇められる程に偶像化しても、その精神生活に於ては、無知の幼児が死を恐れるのと同じことであつた。

而して當時の民衆は如何なる状態であつたかと考へて見るのに、徳川幕府の樹立によつて世は安定を得たけれども、武士と民衆との劃然たる階級制度は依然として或はより一層に嚴存し、世は武家の世であり、政治は武士の政治であり、社會は武士の社會であつた。さうして、ただ民衆の疲れた生活意識は、信仰によつて癒されるのみであつたが、それも島原の一揆後は嚴重な監視の下に置かれて、信仰といふ唯一の安全瓣も塞がれてしまつたやうな状態にあつた。そこで彼等は、江戸時代に特に目立つ享樂の生活へと奔馬の如く駆け入つたのであらう。

而して同時に、その武士階級なるものは、漸く世の泰平に馴れると共に、現實の生に惑溺して享樂生活に身も心も浸し盡すに至つた。その享樂生活の一面として、迷信生活が起つて來た。五代將軍綱吉は護持院隆光に盲信して、宏壯なる寺院を興し、生類憐みの令を發して迷妄無類の政治を行ひ、あれほどまでに蒼生を困惑せしめた。而かも彼自身は生來の學問好きで、自ら經子の學を講ずる程の學者であつたにも拘らず、生母桂昌院の迷信惑溺から誘致されて、斯る大迷信に陥るに至つた。一つは天賦の性質もあつたらうが、また一つはその生活と時代との影響によるものと見なければならぬ。

また十一代將軍家齊にしても同様である。彼が日蓮宗僧智泉院日尙に惑溺したのは、一種の享樂生活と見るべきものである。従つて、宗教家としての日尙が愛顧を受けたよりは、封間としての日尙が寵愛を受けたのであつた。當時の奥女中なども、日尙の若い綺麗な僧侶姿を、信仰するといふよりは寧ろ最員にしてゐたといふ方がよい位であつたといふ。茲に至つてか、宗教は最早やその權威を失つて、權勢者の玩弄物化したのである。而してまた權勢者は、全然盲信のためにその理智を暗まされて、權力の威信を地に委したのである。天下の人心が之によつて指導されようとは、固より期待

すべくもないことで、當時の見聞隨筆に見るが如く、何十人かの僧侶が一時に日本橋で晒されたりするやうな宗教界の腐敗を來たしたのも、當然と云はねばならぬ現象であつた。

水戸光圀公の事蹟を記した「桃源遺事」の記載によると「寛文五年、西山公御領内の淫祠三千八十八御除なされ、又縁起のたしか成社をば御修復遊し、神職の者をも官位社料等夫々に被仰付候。又翌年、新地寺院九百九十七御のぞき、三百四十四寺の僧の破戒なるを御諭し被成候て、百姓に被成候。古跡の廢寺等皆修葺興復被成候。且能僧を御まねき被成候」とある。如何にも學識徹底した西山公のやりさうな事である。然し民心に深く食ひ入つた邪信仰は、斯る大厦の倒れんとするを一木で支ふるが如き力を以て何處まで徹底的に除去し得たらうか。學問の府と云はれた水戸の城下に、生殖器崇拜などの多くの淫祠が今日でも依然として遺存してゐるのを思ひ合せると、ここに何かを考へさせるものがある。

光圀公のやうな覺醒者があつても、徹底的な迷信退治は困難であつた。それ位之は難かしい問題であるのに、その當時當面の爲政家からしてこれに惑溺してしまつては民衆が迷信の門に走り易い傾向を帯びたのは、正に當然のことであつた。之は獨り、綱吉や家齊の時代のみに限らない。何時の時代でも同様である。云ふも畏れ多い事であるが、彼の國史上の汚點たる道鏡が出た時の状態でも、恐らく同様な民心の有様にあつたらうと思ふ。

斯様に見て來ると、權力者がその權力に迷信することも駄目であるし、またその權力を抛棄して宗教迷信に惑溺するのは、尙更駄目であることが明かになつて來る。そこで、どうしても、心理的の基礎を確立せねばならぬといふ吾人の主張を、必然的に強めることになつて來る。

四、心理的根據の確立

すべて迷信惑溺者の信仰は、高所に立つた生活理想に近づくための信仰でなくて、

生活の一部の缺所を満たさんとするための信仰である。即ち生活を支配し進めて行く信念ではなくて、生活を彌縫し糊塗せんとする一時的の信念であるに過ぎない。此處からして、迷信にいろいろの弱所缺點が含まれるのは、當然の歸結であらねばならぬ。生活の一部を彌縫する信念であるから、他の健全なる部分に對して勢ひ種々なる矛盾や破綻が生ずる。そこでその辻褄を合せるために、その健全なる部分をも曲げて迷信に迎合しようとする。之が病的なる信念の固執であつて、何處までも自分の非を被はうとするのである。またその結果として排他的になり、他人の忠言は容易に耳に入れまいとする。そのためいろいろの口實を拵へて、自分の非を辯護する。勿論それは有意識になされることもあり、また誤つた信念から無意識的になされることもあるがその結果から心理的に分析して見れば、それが保護色である事實に變りはない。斯く何事でも自己中心的に、都合のよいやうにと解釋するから、勢ひ判断の錯誤を來し、理性では承認し得ぬものまで信仰することになる。神は元來理性の承認を経た信念の

寫象でなければならぬのに、狂つた判断で信仰するために、理性の方を曲げて、元來が自分の信にないものを信するに至る。斯やうに狂ひは狂ひを生み、遂にはその狂ひが享樂化し、目的化し、理智の光をも失ふやうになつてしまふので、迷信惑溺から發狂者が生ずるのはよく聞くとところである。

故に此の病的状態を救済するには、單に正面からその信仰を迷信なりと呼號して抑へて行つても、それはただ迷信者の排他的な精神に刺戟を與へて、その反抗心を激發せしめるに留まるものである。自己の信する事に對して、頭から「迷信なり」と罵られることは、必ずや好い感情を與へるものでない。己惚れと何とやらのないものはなといふ通り、人間の自尊心は案外に強いもので、それを單に理窟によつて破壊しようとすることは、却つて感情によつて反抗的に報いられ易いものである。理性の錯誤の問題が感情の問題に變ずると、反抗から反抗を生んで、錯誤は益々助長され、一寸冷かに考へれば直ぐ分ることでも、感情的に誇大されて大問題になる。感情と理性と

は互にその迷誤を助勢し合つて、危険な事態に奔馬の如く驅り入れられる。之は街上で見聞する喧嘩などによく見られる心理状態であるが、迷信や邪教に惑溺する者の心理にも、この種類のものが少からずある。故に余から見れば、彼の天草の一揆などもこの感情としての問題が多分に入つてゐるやうに考へられる。即ちあの亂は、時の政府の處置にも、迷信者の心理状態を辨へぬ處から來る失敗があつたから、あれだけの大きな事件になつたのであらう。織田信長と本願寺との問題でも、信念の争ひよりは意地の張合ひの分子の方が多かつたやうである。その根本の原因は信仰であつたらうが、その結果に於て意地の張合ひとなつては、何處まで行つても果てしのないことで解決は益々難かしくなるばかりである。

さうして斯る意地の張合ひは、一種の群衆心理的作用によつて、その迷信的團結者が多くなればなる程、益々強大される事が多い。一人でやつては張合ひのない、滑稽じみた事でも、多勢でやる場合には甚だ張合ひのある、是認すべき事と考へられるや

うになる。之は各個人間に、大なり小なりの暗示作用が働くからである。例へば、催眠に感じにくいやうな人でも、他の人の催眠状態を見せて、それから暗示を與へれば直ぐ感じ易くなる。これは、初めは催眠術に對して半信半疑であるから感じないのであるが、他人の催眠状態を見せられて、感ずるといふ暗示を與へられるからである。迷信の場合も同様である。初めは自分の理性で判斷して、馬鹿々々しい迷信だと考へてゐても、自分の友人がその信仰に入り、次いで自分の兄が信仰するやうになり、父も母も妻も信するやうになつて來ると、いつか自分もそれを信じなければならぬやうに思はれ出し、さうしてそれに捉はれてしまふのである。自分はこの實例を度々見聞した。これは、一種の群衆心理とも解釋出來ようし、また各個間の暗示作用ともいふことが出來よう。迷信が多く恐ろしい傳播性を持つて居り、たやすく人の心を捉へることがあるのは、斯る心理状態に基くものである。故に迷信退治策を考究するに當つては、此の群衆暗示を消滅せしめ、その傳播性に基く迷信者の團結力を破壊すること

が必要である。さうしてその爲めには、迷信者を各個に孤立せしめて、その信念を冷却せしめる策を取らねばならぬ。徒らに彼等の團體を壓迫しても、それはゴム鞠を押し潰さうとあせるやうなもので、勞して功少なきものと云はねばならぬ。

また翻つて考へるに、迷信が流行するのは、その時代に何らかの缺陷があるからである。求め悩みて得ざる所を満たすために、或はその満たされざるを慰めるために迷信に走るのである。故に迷信を退治するといふことは、換言すればその満たされざるを與へることではなければならぬ。徒らにその迷へる行手を塞いで、行くべき道を示さぬことは、ただその迷ひをして深からしめ、激しからしめるに過ぎない。此の心理状態は、唯に迷信のみでなく、あらゆる方面に見られることである。例へば少年が不良事を爲した場合でも、單にその不良行爲を戒めるのみでなく、他に爲すべき善良行爲を教へてやらねばならぬ。彼ら少年は、爲すべき事を知らないので止むを得ず、心の不満が驅るままの悪事を爲すのであつて、その悪事を封せられて向ふべき道を示され

ぬ時には、他家の物をも盗むやうな社會的罪惡にまで進展して行くことが多い。迷信も之と同様の状態に在るものと見ることが出来る。時代そのものの迷ひのために、知性の満足と慰藉とを得られぬ民衆が、丁度心太ところてんが管から押し出されるやうに、必然的に迷信の門戸に進んで行く。歐洲大戦後の思潮動亂に連れて、諸種の權威がその價值を疑はれ出した今日、極めて卑屈な迷信が流行するのは、さうした心的推移の結果としか思はれない。それは、あの室町時代末期のそれにも似てゐたらうか。それにしても、あの當時と同じ様な迷信退治失敗の歴史が、今日に於て再び繰り返される事は萬々あるまいが、この好ましからぬ傾向が動いてゐることだけは疑はれない。

五、當面の策

科學思想の普及、宗教思想の徹底、これは迷信退治の永遠の方策として動かぬところであるが、然し吾人の眼前にある幾多の迷信に對する當面の策を取ることに、手ぬかりがあつてはならない。

前にも屢々云ふ通り、不幸にして既に迷信に入つた者をその渦中から救ひ出すには單なる説得な辯論や攻撃では容易に目的を達することが出来ない。斯る者を救ふにはなるべく氣長でなければならぬ。先づ第一に出来るだけその迷信的の行爲を繰返させないやうにする。若し事情が許すならば、その境遇を一變し、その交友を一變し、その職業をも一變して、全然生活状態を改變させることが必要である。

それと同時に、成るべく徐々に且つ間接にその相手に正當なる理解力を養成させるやうな豫備知識を吹き込むことである。例へば憑物といふことを信じてゐるやうな人々には、先づ夢の説明から人格變換の實例などを語り、能ふべくんば催眠術の實驗などを見せて、的確なる證據と理論とからこれを正當なる判斷に導くのである。余の今日までの經驗によると、憑物を信じてゐる迷信者には催眠術の實驗をして見せて、その所謂憑物を即座にいろ／＼に變更させて、これらの憑物は皆本人の精神作用に外ならぬことを説明してやるのが最も有効であつた。さすれば病的の精神異狀者にあらざ

る限りは必ず目覺める。元來迷信は一時の思ひ違ひに過ぎないのだから、正當なる誘導法によりさへすれば早晚救済し得らるべきものである。ただ事を急いで相手の感情を激發させぬやうに注意すべきである。

然し類似の現象の妄想になると、如何なる手段方法を以てするも今日までのところ矯正し得られないことになつてゐる。卑近な例でこの兩者の區別をいふならば、我々が始めて友人の家などに行つて、南向きの門を東向きと誤認するやうなことは稀でない。然し後によく友人の説明を聞いたり、若くは磁石で方位を考へたら自分の誤信であつたことは直ぐ氣がつくのである。ところがそれが妄想になると、たとへ如何なる説明を聞いても、東向きであることを信じて疑はず、友人の言は更なり、磁石まで間違つてゐると主張するに至るのである。かうなると最早や手のつけやうがないものであるから、その矯正に骨折るよりは、然るべく隔離して、他の者をそれにかぶれさせない工風を講ずることが肝要である。これが當面の問題の急なるもので、天理教があ

の通りの繁榮を來したのはこの方策を誤つたからであり、大本教も一時その傾向にあつたのを漸く食ひ留めたから、今日の如く衰微するに至つたのである。

迷信と邪教終

大正十一年十一月廿五日印刷
大正十一年十二月一日發行

文化叢書「第十七編」
迷信と邪教（奥附）
定價 八拾錢

版權所有



著作者 中村古峽

發行者 長坂金雄
東京市神田區今川小路三丁目九番地

印刷者 岩見辰次郎
東京市淺草區小島町五十九番地

印刷所 清美堂
東京市淺草區小島町五十九番地

發行所

國史講習會

振替東京一六八五番
電話九段二三一二番

（堂正長川瀧所版製）

127A-63

文化叢書既刊書目

定價各冊十八錢。送料四錢宛

◇第一編	人類の進化	山内繁雄著
◇第二編	佛教と國民思想	鷺尾順敬著
◇第三編	江戸と上方	笹川臨風著
◇第四編	歌舞伎劇と其俳優	關根默庵著
◇第五編	旗本と町奴	栢原昌三著
◇第六編	竹本劇と其作家	岡本綺堂著
◇第七編	南畫史要(定價壹圓)	梅澤和軒著
◇第八編	東洋文化觀	松井等著
◇第九編	古墳と上代文化(定價壹圓)	高橋健自著
◇第十編	圍碁將棋	幸田露伴著
◇第十一編	趣味の民謡史(定價壹圓)	藤澤衛彦著
◇第十二編	日本憲法制定史	藤井甚太郎著
◇第十三編	茶道研究 茶器の見方	今泉雄作著
◇第十四編	日本舞踏史	岩橋小彌太著
◇第十五編	儒教と日本文化(定價壹圓)	中村久四郎著

